

---

# 『幼馴染みのクリスマス』

灯月樹青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『幼馴染みのクリスマス』

### 【Nコード】

N3129D

### 【作者名】

灯月樹青

### 【あらすじ】

陽輔編完結 お前知ってる？俺の気持ち。俺がどんな風に思ってるかを…。2008/05/16更新 朱

美編完結 ようちゃんに他意はないんだろっけど あまり行きたくない。だってそこは 私の知らない部屋だから。私知らない ようちゃん… クリスマスだし

！っていつのを合言葉に（？）短編小説『エイプリルフール』の二人にスポットを当ててみました

## 1・約束(前書き)

この小説は短編小説『エイプリルフル』の番外編です。まず短編小説『エイプリルフル』(<http://ncode.syo.seitaku.com/n3128d/>)を読むことをお勧めいたします。

## 1・約束

ガタンガタン

規則的に走る電車から何気なく景色を流し見る。

時間はまだ17時。

夕方とも夜ともなんとも曖昧な時間帯にも関わらず、外はすっかり暗くなっている。

(冬だなあ)

ふとそんな事を思った。

人々が浮かれ、笑い、楽しそうに過ごしているその空気が、私に年末を知らせている。

何気なく見ているはずのきらびやかな街のネオンに瞳を奪われる事も、近頃は少くない。

(クリスマス…なんだよなあ)

今年も一人かなあ　とは思うけど、あえて考えないようにする。

脳裏に幼馴染みの姿が浮かぶ。

本当はずっと前から幼馴染み以上の想いを寄せる人。

彼氏の一人もいたことがない私を友達はおかしいというけれど、心から望むのは　一人だけ。

その人以外見えなくなってる私の異性に対する態度は素っ気なくて、お子ちゃまだと友達にからかわれていたのも今年の春先まで。

再開が偶然だったか必然だったかと聞かれたら、必然だったと答えるだろうと思うぐらいに今はすっかり乙女らしい。

かといって告白する勇氣はないけれど…。  
再開したエイプリルフルから、私達は連絡を取り合っている。  
実は住んでるのが駅3つしか離れてないこともその時に知った。  
世間は狭いなと言って笑いあっただけ。  
ようちゃんはモテる。  
そんな事を知ったのも連絡を取るようになってから。  
今は彼女、いないみたいだけど……。  
キラキラと光るネオンが瞬く。

「誘って…みようかなあ」

窓に映る自分に話し掛けるようにポツリと呟いてみる。  
折角のクリスマス。

どこに行ってもムードのある時期。  
ダメモトなのは変わらない。

再会出来ないんだと、この気持ちを諦めようと決めた日に、私はや  
つと彼と再会した。

諦めようとまで思っていたのに、いざ再会すると今の関係を壊した  
くなくて動けないでいる。でもクリスマスぐらいぶつかってみて  
もいいかなって思える。

モテモテのようちゃんの事だ。

彼女がいないからと色んな女の人に誘われているだろう。  
クリスマス3日前だもの。

もしかしたらもう予定があるかもしれない。けど。

(断られたら 笑っちゃえばいいや)

いつもとは違ってこんな風に考えるのは、浮かれたこの街の喧騒が  
そうさせるのだろうか。  
気付くと、自宅より3つ前の駅で降りてしまっている自分が可笑し

くなる。

(いつもなら絶対に無理なのになあ)

いつも見過ごすだけだったその駅をマチマチと見つめる。

私が住んでる駅より少し小さな駅。

何回も降りようとしたけど、すごく降りたかったけど  
降  
たことのない駅。

いつもようちゃんの背中が吸い込まれていく駅。  
降  
ただ、それだけ…。

そういわればそれまでなんだけど…。

自然に…本当に自然に顔がニヤけてしまう。

いつもようちゃんが居るところに自分がある、それだけの  
ことが、なんだかとても嬉しい。

ふとホームにある鏡を覗くとそんな自分の姿が目に入る。

(あーこれじゃ絶対ヤバイ人だよっ、平常心、平常心…)

普通にしようと思えば思うほど、ニヤけた顔が元に戻らなくて  
鏡の前で四苦八苦する。

「  
朱美<sup>アケミ</sup>？」

見られてるなんて思いもしなかったから。

「よ…よ、ようちゃん？」

望みも虚しく、振り向いた先にいたのは、私の幼馴染み。

「何してんだ？」ここで

( あ、穴があつたら入りたい )

「よ、ようちゃんこそ、何してんの？」

「いや、俺の家この駅だし」

「あつ、あゝ…そ、そうだよねっ、お帰りなさい…」

うつわあゝキヨドリ過ぎだし私っ！

キヨロキヨロと辺りを見回すが穴などあるわけもなく…。

「<sup>アケ</sup>朱？」

顔を覗き込んでくるようちゃんの顔を直視することも出来なくて

、きつと今私の顔は真っ赤だ　　そうに違いない。

先程まで抱いていた意気込みなんて熱に変換されてどこかに行つてしまつたみたい。

かかっていた魔法が解けてしまった。

「なんか用事でもあつた？」

「…え、えつと」

調度いい言い訳すら私の頭には浮かんでくれない。

「　　つ、つい降りちゃつた」

( えーいなるようになれっ！ )

「別にただのベッドタウンだぜ？」

「あーそーなんだ？」

棒読みかよ私　　。

「折角だから寄ってく？ウチ」

「ようちゃんいつもそればっかり（笑）」

笑ってごまかせるいつものセリフ。

電車で会ったりすると毎回言われるお決まりなセリフ。

だから私も決まったセリフを返す。

ようちゃんに他意はないんだろうけど　あまり行きたくない。

だってそこは　私の知らない部屋だから。

私が知らない　ようちゃん。

まあ実際は一緒にいた時間の短いから知らなくて当然なんだけど。

「ま、気が向いたら来いよなあー」

そういつて頭にポンと手を乗せられる。

まるで幼い子にするみたいに。

絶対ようちゃんに恋愛感情はないよなあ〜とつくづく思う。

これが私が自分から言い出せない理由の一つだったりする。

「気が向いたらねっ」

よしよしとそのまま頭をなでられている私は…ようちゃんにとって  
犬みたいなものなんだろうか…？

あゝ、自分で考えてなんだかすごく泣けてきた…。

ようちゃんならありそ…。

あゝ、マチ泣きそ…。

「　　…　　つて…ま？おーい、朱聞してる？」

「　　…　　へ？…何？」

ふと視線を上げると視界一面を覆うようちゃんの顔。

( つ!!!!!!!!!!!!!! )

これでもかかってぐらい一気に血液が頭に集まるのがわかる。  
心臓も聞こえちゃうんじゃないかってぐらいドキドキしてる。

し、心臓に悪い……。

そんな私の心境を知らないだろうようちゃんは不思議そうな顔をしている。

「朱?どうかした?」

「ううん、なんでもないのっ!なんかボーっとしちゃって 何て言ったの?」

我ながら 下手な言い訳であ〜。

変って思われたかなあ……、やっぱ。

探るようにようちゃんを見上げると全然違う所を見ていてホッとする。

「ならいいけど 朱さあ、クリスマスって暇?」

「ふえ?なんで?」

「なんでって…俺も今年一人だからどっか行かないかなって」

一瞬、聞き違いかと思った。

ほうけた顔をしなかった私自身に拍手喝采したいよ、マヂで。

「あ〜予定あるんなら別に……」

「い、行く行く!」

折角の神様がくれたチャンスを逃がしたくなくて、ようちゃんの言

葉を遮る。

神様ありがとお〜！！！！

「そか、んじゃ9時に駅まで迎えに行くからな？ちゃんと来いよ？」

「はい」

盆とクリスマスと正月が一度に来たってこっちはならないだろうって思うぐらいきつと私は笑ってる。

他の人からみたらきつとバカに見えるんだろうなあ。

ま、ようちゃんが笑ってくれるからいつか

「あ、朱ちよつと耳貸せ」

「え？」

不意に思い付いたようにようちゃんが私の腕を引っ張り、耳にようちゃんの吐息がかかる。

掴まれた腕だとか視界に入るようちゃんの髪だとかを必要以上に意識しちゃって　まるで魔法にかかったかのように私は動けなくなる。

(ち、近いよっ！ようちゃんっ！！)

きつとようちゃんにとってはなんて事もないのかもしれないけどっ！！！！

(でもでもっ！！！！)

それに拍車をかけるかのようにようちゃんが囁いた言葉が、  
せっかくのクリスマスなんだからめかし込んで来いよな』　だな

んてっ。

しかもしかも、言いたいことだけ言って私に向けた笑顔がなんだかとても艶っぽくて。。  
もう反則ですって…。

顔 上げられない。

鏡見なくてもわかる、今の私の顔 真っ赤だ。

そのあとどうやって逃げたか記憶に残ってないけれど 気付くと私は見慣れた駅の改札を降りていた。  
まだきつと顔は赤い。

( 一人暮らしでよかったかも… )

心配されることも、詮索されることもないから 。

( クリスマスカあゝ )

おめかして言ってもたいした服持ってないし 。

( …霞に買い物付き合っって貰うかなあ )

問題は山積み。

なにはともあれ、こうして私達はクリスマスの約束をした 。

クリスマス・イヴまであと3日。



## 1・約束（後書き）

毎日2話ずつ更新いたします。全部で9話構成になっています。

## 2・買い物(前書き)

今回は2話更新されています。

1・約束 からお読み下さい。

## 2・買い物

「ほら、早くっ!!」

目の前で睨みを利かすのは親友の霞<sup>カスミ</sup>。

黒のストレートロングに白いコートがよく似合っている。

普段は見た目通り凄く優しい子。

なんだけど　彼女は…妥協を知らない。

絶対にひかない彼女の趣味の一つが　『着せ替え』。

っていつても別に変な服じゃないんだけど…。

「朱美っ！早く試着してよね」

顔怖いよ…霞さん　なんて言えるわけもなく…。

手渡されたのは淡いピンクのワンピース。

可愛いよ??

確かに可愛いと思うんだけど。

「私には似合わないってば〜」

「着なきやわかんないでしょー、朱美はいつもあっさりしたもの着すぎなのっ！たまにはこういうの着なきやっ!!」

霞いわく、綺麗になれるのにそれをしないのは許せないらしい。

今のターゲット　私。

「早く!」

まさに鬼のような形相で睨む霞に勝てた事はないけど　それでも

ここまで意見を受け入れて貰えなかったのは初めてだ。

(…なんかしたかなあ)

普段よりも高めに設定された試着室でワンピースを眺めながら考える。

霞に買い物付き合っただけと言ったのは昨日。

ホントは昨日のうちに買い物行きたかったけど　霞に用事があったから今日になった。

そう、今日はクリスマスイブの前日。

時間なんて　ない。

諦めると着ていた服を脱いでワンピースを着る。

生地が暖かいから考えていたよりも温かかった。

ジーンズを脱いで鏡を見ると見慣れないものを着た自分の姿。

(やっぱり似合わないよなあ)

ここで脱いでしまうとまた着ることになるのを長年の経験で知っていたから　。  
諦めてカーテンを開ける。

「どお？」

「……………」

ほら。

霞が何も言わない。

やっぱり似合わないよなあ。

あー落ち込む…………。

「脱いでくんね」

そういつてカーテンを閉める。  
鏡に映る自分の姿がとても滑稽に映る。

(……なんか…やだなあ…)

似合わないとは思ったけど　まさか絶句されるなんて　。  
手早く着替えて普段の恰好に戻ったけど　なかなか出ていく気にならなない。

座り込んで鏡に映る自分を見る。

(　　なんか…惨めかも…)

視界がボヤけ始めるのを慌てて抑える。

それでも止められなくて、抑えられない一滴の涙が頬を伝う。  
その時　。

「朱美…早く出てきなさいよっ!」

急かすような霞の音がする。

それに身体が反射したかのように無意識にカーテンを引く。

そこには頬を紅色に染めながら　目を血走らせている霞の姿があった。

私が口を開く間もなく霞の手が私に伸び、掴まれたかと思った瞬間  
思いきり腕を引っ張られる。

「もう…時間ないんだからねっ、靴とコートと…あー小物も欲しい  
わねっ!」

「ふえ?」

「あ、そのワンピース買いたからね!これ絶対っ!朱美の意見は受け入

れられないからねっ」

そう強く念を押され、わけの解らぬまま頷くと満足そうな笑みを返される。

「さ、ブーツブーツ」

今までに見たこともないぐらい機嫌のいい霞に引つ張られながら、その後も靴や鞆、抵抗も虚しく今まで殆ど使ったこともない化粧道具を購入することになった。化粧道具の購入に頷いた時の霞の満面の笑みの理由<sup>わけ</sup>を知るのはもう少し先の事。両手にある色とりどりの紙袋を眺めると何だか気が重くなる。

(これ 明日着るんだよね…)

普段着ているものと真逆と言っても過言ではないだろうと思う。

( 笑われるぐらいなら、着ないって選択肢もありかなあゝ、霞には悪いけど )

「んじゃ後は朱美の家だね」

「え？家？」

「あつたり前じゃない 明日の朝は完璧にしてあげるから大船に乗ったつもりがいいよ」

( 絶対に好意だとは思っただけど…思っただけど 、それじゃ服選べないじゃんっ！！ )

なんて私の心境などご機嫌な霞が気付くわけもなく…満面の笑みを浮かべる霞を断る事も出来ず 、私の家を知ってる霞を巻くこと

も出来ず、私達は二人仲良く家へと帰宅(?)したのであった。

クリスマス・イヴまであと6時間。

## 2・買い物（後書き）

毎日2話ずつ更新いたします。全部で9話構成になっています。

### 3・当日

初めに言っておこう。

自慢じゃないけど私の寝起きはいいと思ってる。

まあ、寝相もいいと思うんだけど…って、そんな話じゃなくてね。

「ムリだってばっ!!」

だからこそ断じて朝から声を荒げているのは寝起きで不機嫌だからじゃない。

「黙れ」

霞とは違って。

私と正反対。

酒を飲んだ訳でもなく、もちろん何かしたわけじゃない。

けど…。

(目が据わってるよ…霞さん…)

霞を泊めると毎朝こうだけど 今日是一段と日が悪かったようだ。  
ここまで酷いのは初めて見た。

「ん」

「……」

口数が少ない っつか喋ってないよね…コレは。

「あん？」

「　っ！！わかった、着るっ、着るからっ！！」

怖いなんてもんじゃない。

死活問題なのです。

こっに見えて霞　空手の段持ちだから　。

そっいえば彼氏のトコ泊まりに行くとは別れるとかって言ってたっけ

……あは……　解るかも　。

「……………」

（　身体が…早くこの場から立ち去れって言ってる気がする…）

「…っ！！き、着替えてくるねっ！！」

背後でもものすごい冷気を感じ、振り返ることもせずにはリビングへと逃げて来たんだけど…、まるで肉食獣に睨まれた草食獣の気分…。

あの容姿にあの気迫は…危険だ…。

身の危険を感じたのは動物としての本能だろうか？？

今は午前6時。

用意もあるからって言って、7時には起きようねって話したのは昨日の夜のトコ。

まだ…6時間も経ってないんじゃないか？

着替えるのにはちよつと寒いので足元にあったセラミックファンヒーターのスイッチを入れる。

暖かい風が身体に当たるようにファンヒーターの前に座り込む…じゃなくて、陣取る。

日向ぼっこしてる草食獣っぽいかなあ〜。

（　っ！！！！！！）

なんて、感慨に浸ってる暇なんて草食獣にはないらしく…、扉のガラスに浮かんだ肉食獣の姿に敏感に反応する。背筋を寒いものが通るんだから…絶対本能だと思う。不興を買わないように急いで着替える。淡いワンピースを着てカーデガンを羽織る。鏡を確認することなく肉食獣の待つ寝室へと向かう。

背後から襲われたくないし…。

「着たよー」

「ん、ん」

扉をくぐると…なんとか逆鱗に触れることはなかったようだ。心底ほっとする。

ちなみに、寝起きの霞の言葉を解説すると、一回目の「ん」は「そっか」の意で、二回目の「ん」は「そこに座れ」の意だ。

…ここまでわかるようになるのに何度救急箱の世話になったことか…。

「っ！！」

示されたところに座った途端私の後ろに回りこんだ霞に、草食動物的な立場にいる私の動物的本能なのだろう。

必要以上に身体が強張る。

後ろを振り向きたい衝動をなんとか避け、肉食獣とは目を合わせちゃいけない（挑発しない）、その場に留まることにも成功する。

が。

次の瞬間耳元で響いた『ヴォー』という音に動物的反射なのか、気付いた時には背後を壁に預けていた。

目の前には獲物に逃げられた、じゃなかった、目を丸くしている

霞の姿。

その手にあるのは愛用しているドライヤー。

過剰反応し過ぎなのかな…、私。

音の正体がわかってホッとしたので、壁から離れて指定された元の位置に戻る。

もう一度近くで音がする。

髪に当てられる暖かな風がとても気持ちいい。

（あゝ眠いかも…）

ついついウトウトしてしまう感覚と戦いながら、霞が弄るに任せる。髪を梳いたり、引っ張ったり。

『痛い』なんて言葉いえるはずもなく。

（私は人形…私は人形…）

とわけのわからない思い込みを続けていると…。数分と経たず。

「終わり」

と言う声と共に身体を駆け抜ける解放感。

…あ、いや、ホント怖いんだって…。

「ありがとう」

と言って立ち上がる　のを。

「いたっ！」

と、髪をつかまれたことによって阻まれる。

霞と向かい合わせに座らされ…霞の手にはたくさんの筆(?)…。

「化粧」

単語を呟くぐらいには起動し始めた霞の手によって人生四回目の化粧が施される。

ちなみに、一回目は成人式。

親に泣き付かれたこともあって振袖を着せられ(スーツのつもりだったのに)、化粧させられた。

二回目は昨日、化粧品を買うときに。

三度目は昨夜。

練習だと言って自分の手でやらされた。

慣れた…とは言わないが、初回とは比べ物にならないぐらい成長はしたんじゃないだろうか？

あ、いや、化粧する方じゃなくてされるほうだけど。

初回…美容師さん泣かせたからなあ…確か…。

ん、記憶の奥底に封印しておこう。

上を向かされ、下を向かされ、顔にファンデーションやらチークやら、マスカラやらアイラインなどが塗られていく。

…断言しよう。

あまり気持ちのいいものじゃない。

「ん、出来た」

そうこうしているうちに寝起きの機嫌は最悪でも手際のいい霞の手で化粧が施される。

鏡に映った自分は…自分で化粧をした時と違い見れる顔になっている。

ありがとう

とお礼を言おうと霞を見上げると…上から迫っ

てくる霞の姿が見えたかと思うと…視界が閉ざされる。

「ん…」

ギョ。

何故か抱きつかれる。

…寝起きこんなだと絶対可愛いといわれますよ…霞さんとは口が裂けてもいえない。

…命の保障がされないから。

まあとりあえず可愛いのでこっちからも腕を回してギョッ。

うん、柔らかい。

(ふわふわして抱き心地いいーw)

なんだか役得を満喫して レズのケはないからね 時計を見る

となんと8時半。

財布だとかなんだかを鞆に入れようと手を伸ばすと…鞆が目の前で持ち去られる。

犯人なんて一人しかいないけど。

勝手知ったるなんとやらで、タンスをあけたり引き出しを漁ったりしてそれらのものを全部詰めると鞆を私に押し付ける。

渡された鞆の中には、財布、手帳、リップ、ファンデーション、ハンカチとちり紙などが入れている。

(自分で揃えられるけど…)

とは言わない。

朝方は霞にツッコミをしてはいけないと身に染みているから。笑顔で「ありがとう」と言うと昨日新調したコートを着込む。

鏡を覗き込むと普段とは全く違う自分の姿。

（笑われないといいけどなあ〜）

髪をいじりながらそんなことを思うと後ろから背中を押される。  
振り向くと霞が時計を指しながら仕切りに背中を押している。

「ん、じゃあ行くね」

玄関までグイグイと押されながら掃きなれないヒールを履く。

「行ってきます」

という私の声に手を振る霞の腕が、扉を閉じる寸前にガッツポーズを作る。

（頑張れかあ〜）

外は晴れ。

準備は万端。

クリスマス・イヴ当日。

### 3・当日（後書き）

毎日2話ずつ更新いたします。全部で9話構成になっています。

#### 4 ドライフ(前書き)

本日も2話更新しています。《3・当日》からお読み下さい。

#### 4・ドライブ

駅までの道のりはそんなに長くはないんだけど、履きなれない靴での歩く練習には丁度いい。

ヒールのせいが見える景色がちょっと違う。

そんな些細なことが嬉しく感じちゃうのは今日という日をようちやんと過ごせるからかなあ？

いつも10分もかからない道のりが今日は15分。

早く出てきててよかったかな。

駅にある人の気配はそんなに多くはない。

駅まで迎えに来るって言うってたから改札まで行こうかな　と、駅の階段を上がりはじめた途端。

ブッブー

と、大きな音がするので振り向くと、ロータリーにある青い車の窓が開く。

「朱美、こっち」

運転席から助手席側に顔を乗り出して名前を呼ぶのは大好きな顔。

「ようちちゃん!...うっわっ!...!」

数段ある階段を駆け下りようとして履きなれないヒールで躓いてこけそうになる。

「朱っ!?!」

「えへへ...ごめん、平気」

なんとか踏みとどまって舌を出す。

ようちゃんを見ると…やっぱりというか…呆れ顔。

あはは…やっちゃったなあ。

「まったく、気をつけるよなあー。ま、早く乗れよ」

そういつてようちゃんが中からあけたドアから、ようちゃんの車に乗り込む。

車の中は結構綺麗に片付いていて、置かれたクッションがふかふかで気持ちいい。

駅集合つていうから電車で行動するもんだとばかり思ってたから、慣れないヒールで歩くの頑張ろうと思つてたけど…、車での移動ならそんなに苦にはならないかもしれない。

「ようちゃんが車持つてるなんて知らなかったよー」

「あー、言つてなかったっけ？」

「全然！持つてるつて知つてたら行きたいトコ一杯あつたのになあ」

知らなかったよあ、車持つてるつて知つてたら二人で色々行けたじゃんかあ。

ん、まあそれは別にしてもホントに行きたいトコ一杯あつたんだけどなあ。

友達皆車持つてないし免許もないからいけなかったトコ。

「んじゃ来年でいいか？」

「え？何が？」

「行きたいトコあるんだろ？」

「え？連れてつてくれんの!？」

「だって、行きたいんだろ？」  
「うん！約束だからね！」

やった、やったw  
これって…誘ってもOKってことだよな！？  
あ…でも…。

「じゃあようちゃんに彼女居なかったら誘おうって」  
「おう。約束だからなあ？朱に彼氏居たって行くぞ？」  
「あははw来年も彼氏なんていないと思うよ」

(ようちゃん…私に彼氏なんて出来ないよ。出来るとしたらようち  
やんだだけもん)

なんて、心の中で言ってもしょうがないか。  
車はスムーズに駅のロータリーを抜けていく。  
なんていうんだっけ？  
あんまり車とか詳しくないからわからないんだけど…多分コレ運転  
の難しい車。  
ん…と『まにゆある』って言ったっけ？  
ようちゃんの手が忙しなく動いてく。  
前を見ながら真剣な顔をしている姿がすっごくカッコイイ…。

「朱？どした？顔になんか付いてる？」

見惚れてた　　なんて言えない…よね。

「え…と、何処向かってるのかなあ？って」  
「あゝ、一回地元の方戻ろうかと思って」  
「地元？」

地元っていうのは多分、あの丘の木があるところ。  
今は二人とも戻るべき家はないけど…。

「そ、岳伊匠タケイタクミって覚えてる？」

「え？岳ちゃん？」

岳伊匠っていうのは私ともようちゃんとも仲のよかった男の子の名前。

地元から引越してから会うことも連絡を取ることもなかったけど。

「そ。引越してからあいつとは連絡取ってたんだよ。知らなかっただろ？」

「…え、だって、岳ちゃん知らないって…。」

確か…ようちゃんが引越してすぐに仲のよかった岳ちゃんに聞いたら…岳ちゃんも知らないって…。

「俺がそう言えって言ったからな。ってか、朱今連絡取ってないだろ？」

「うん、引越す時携帯とかも持ってなかったし」

お互いなんかようちゃんが間に居なくなったら縁遠くなっちゃってたし…。

「こないだ匠の方からメール来てたからさ、朱美のコト話したら会いたってさ」

「岳ちゃんなんて懐かしい〜！！会う、会う！」

懐かしい！！

岳ちゃんって確かすごく綺麗な顔してたから…、今はもっと綺麗なのかなあ？

私とようちゃんと同じでやっぱりやんちゃで、かといってそれだけじゃなくて頭もよかった岳ちゃん。

会いたいけど…でも…それって…二人つきりじゃなくなるってことだよな？

うう…デートだって思ったの私だけだったのかなあ。

運転していて前を見るようちゃんの顔をジーンと見つめてみるけど…そんなことわかるわけもなくて。

「朱？今度は何？」

「…なんでもないよーだっ」

子供っぽいなんて自覚してるけど…でもなんか…二人つきりで過ごせると思ってたんだけどなあ。

はあ…あ〜でもドライブなのは変わらないよね？？

地元行くまでは二人つきりなわけだし…いつかな、それで。

「どれくらいで地元着くの？」

「ん〜、この調子だと2時間くらいかな」

車はスイスイと走っていく。

もつと混んでたら一緒に居られる時間長くなるんだけどなあ〜とは思っちゃうのはしょうがないよね？

まあでも2時間は二人っきりの時間なワケだ。

っていつても特に何かっていうのないんだけど…。

意味もなく好きな人のコト見つめてしまうのはしょうがないよね？？  
どんなに見ても飽きないんだから…ん〜、不思議だ。

（ようちゃん瞳長いなあ。…私より長いかも？…うう〜なんか…負

けた気分…)

今まで気付かなかったことに気付いて一喜一憂。  
これもデートの醍醐味 だと思う。  
これが初めてだからよくわからないけど。

「そいや朱普段そういう服着るの?」

「へ?えと…ううん、着ないけど…」

「そ?まあ…その方がいいよ」

チラツと私をのカッコを上から下まで見てからそついったよつちやん。

似合わないってことだよね…、それって。

「…似合わない?」

つて思った瞬間口に出す私も私。

これで肯定されたら…今日一日ブルーかも知れない…。

「あゝ、いや、そういう意味じゃなくて…似合ってるよ。友達の見立て?」

「あ、うん」

「あんま頻繁にそういう格好するなよ?」

「なんで?」

「…動き難いだろ?」

んゝ、どういう意味なんだろう?

…似合ってるって思っていていいのかなあ?

それとも遠まわしに違つって言われたのかなあ?

んゝ、よくわかんない。

「もっと違う格好の方がよかった？」

「あ、いや…今日は車だし…、動き難いとかないだろ？」

「ん、まあ…」

んーよくわかんない。

何考えてるんだろ？

「 あんま深く考えなくていいから」

「…うん」

まあ…ようちゃんがそう言うんなら…きっとそうなんだよね？

「そいや朱、車酔いとかしない？」

「ん、多分…かな？あんまり車って乗ったことないから」

修学旅行とかのバスぐらいだろうか？

家族でどっか行くとかだったら電車だったし…両親共に免許持ってなかつたしなあ。

「え？今まで彼氏とかと出かけたとかしなかったのか？」

(それをようちゃんが聞くの？…なんか…イヤだよ…)

って思ってもそれを表に出したりなんて出来ないんだよね。

ようちゃんは私のことどう思ってるんだらう？

妹…みたいな感じなのかなあ？

「出かけた…ってか、彼氏って居たことないもの」

「…え」

なんでそんな驚いたような顔をするんだろう？  
私…そんなに遊んでるみたいに見えるのかなあ？

「ようちゃんは彼女一杯居たんでしょ？」

知ってるんだよ？

ようちゃんって大学生の間で結構有名なもの。

ようちゃんに再会してからそうい話があるの知ったんだよ。

「…おう」

「モテるんだね」

「…さあ」

ん〜、なんか話題間違えた…よね？

この雰囲気は…なんかすごくよくようちゃんの空気が淀んでる…。

「朱…好きな奴居るだろ？」

「…っ!？」

「…凶星かあ」

な、なんでようちゃんがそんなこと知ってるの!？

え!？

私、そんな態度取った???

いつ!？

…ん〜、記憶にないぞ？

「どんな奴？」

「え…と…」

目の前にいる…とは口が裂けても言えない…よね？

「 バカで、優しくて…しっかりした人 かな？」

「 そか」

もく恥ずかしくてようちゃんの顔見れない…。

「 …クリスマスなのに俺でいいのか？」

「 え？なんで？」

「 本当はそいつと居たかったんじゃないの？」

えっと…コレ…バレてはいないってコトかな…？

でもでも…他の人とした方がよかったんじゃないかなんて…ようちやんの口から聞きたくないよ…。

「 …誘えなかったんだもの」

( ……私からは )

まさか相手の方から誘ってもらえるなんて思ってたし…。

「 ようちゃんこそ…。いいの？クリスマスに隣に居るのが私で」

「 いいんじゃない？気兼ねなくていいし」

「 そっか」

あ…そうなんだ。

私 女として見られてないんだね。

…なんか…霞に女っぽくしてもらったのに…ね。

車内の雰囲気はなんか険悪で…せつかくのクリスマスなのに…何してるんだろ…。

車はスイスイと景気よく走っているのに…。

見かける店見かける店クリスマスマスの飾りをこれでもかかっていうぐらいしているのに…。

その後無言のまま、目的地までの道のりは段々と狭まっていった。

#### 4 ドライブ（後書き）

毎日2話ずつ更新いたします。全部で9話構成になっています。

## 5 パーキングエリア

しゃがみ込む背中をさすってくれる…

もうどれくらい経っただろう。

静寂を破ったのは急になり始めた聞きなれた音楽。

自分の携帯でない事を確認すると視線をようちゃんに向ける。

「ようちゃん？」

「ああ、俺の。悪いけど誰からだか見て？」

「え？何処にあるの？」

見た感じ車内で音がするのは確かなんだけど…携帯が見当たらない。

「シフトレバーの後ろに小物入れあるじゃん？そこ」

…シフトレバーって何???

何語???

「…シフトレバーって？」

「あゝ、わかんないか。俺が左手で弄ってる奴」

…今のって呆れられたかな？

ようちゃんがいうところのシフトレバーの後ろには肘掛みたいな小物入れ。

上にパカッって開けると中になんだかゴチャゴチャ入ってる。

一番上に置かれたブラックの携帯電話を腕に取る。

「誰からだった？」

「え…つと…」

折りたたみ式のそれを開けるとディスプレイに【不在着信 1件】の表示。

それを選んで着信履歴を見ると…。

「誰？」

「えつと、匠…さん？」

「なんでさん付けなんだよ。岳の事だぞ？」

「岳ちゃんなの？」

「そ。あー、朱折り返して電話かけてくんね？」

「え〜！？私が!？」

「んなこと言っただって俺運転してるし…。事故って欲しい？」

「か、かける。かけるから！」

なまじこういうこと言うようちゃんって…顔がマジなんだよね…。

冗談と思えないところが怖い…。

ブラックの携帯に視線を戻すと、操作は自分の携帯とあまり変わらないようで、『匠』と書かれた履歴を選んだまま通話ボタンを押すとそのまま発信される。

トウルル…トウルルル…トウルルル…

規則正しい呼び出し音と同時に鼓動が早くなる。

知ってる人とは言え…もう10年近く会った事も連絡を取ったこともない…。

緊張するのも当然…だよな。

トウルル…トウルルル…トウルル…プツ。

「お前な〜かけてるんだから出るよな〜、ってもしかして今運転中か？」

電話から聞こえた岳ちゃんの声が思っていたよりもずっと低くて…、なんだか全然違う人みたいで声を出せない。ようちゃんに視線を送るけど気付かないし…。

「おーい陽輔ヨウスケ??」

「え、あ、はい。ようちゃん運転中で…あの…」

思っていたよりずっと男の人っぽい声に上手く対応できない。わかってるつもりだったけど…なんかダメだ。でも電話の相手はそんなこと思わないらしくて。

「あ、朱美？マヂ陽輔と一緒にいるんだなw」

「え、あ、はい」

「おーい、なんで敬語なんだよー、俺達の仲だろ〜？」

俺達の仲って 仲がよかったって事かな？

「や、なんか…ビックリしてて…」

「会ったらもつとびっくりするぜ？マヂいい男だから」

「ふっ…大人っぽくなくても岳ちゃんは岳ちゃんだね」

やっとあの岳ちゃんと電話相手の大きくなった岳ちゃんが重なる。昔っからこんな事言っでは笑わせられてたっけ。

「ど〜ゆ〜意味だよそりゃ」

「そのまんまの意味ですよ〜だ」

「朱々？匠の用事何？」

すっかり打ち解けてしまい無駄話してたけど…これようちゃんの携帯だったんだ。

「あゝ岳ちゃん、ようちゃんが何の用だ？って」

「あーそうそう、お前ら何時ぐらいに着く？」

「ちょっと待って。ねえ、ようちゃん何時に着きそ？」

「んゝ11時半には着くって言っというて」

「あー、岳ちゃん？11時半には着くって」

「そっか、了解。わかったって伝えというて」

「あゝい」

電話が切れる音がして自分とは正反対のブラックの携帯をパカリと閉じる。

「岳ちゃんがわかったってさ」

「そっか、わかった」

このまままたさつきみたいなきみたいな雰囲気にはなりたくないなあ。そういえば…さつきの曲。

「ようちゃんさつきの着うたAquaTimezでしょ？」

「ん？あゝ好きだからな」

「小○な掌 だったよね？」

「知ってたんだ？」

「詳しいってわけじゃないんだけどね、私も今着うたそれだから…」

「へえゝ偶然、同じ曲かあゝ」

あ、なんか嬉しい。

一緒なんだあ。  
ようちゃんと同じ

「だからか。初めに自分の携帯確認したの」  
「そ」

「他に何の曲知ってる?」

「ん〜有名なのしか知らないよ。決意〇朝に だとか、等身大のラ〇ソング だとかかなあ。ようちゃんのオススメは?」

「星の見えな 夜 とか、ALNES とかいいと思ったな」

星の見えな 夜 と ALNES かあ。

CD借りてこなきゃ。

「へえ〜今度聞いてみよつと」

「貸そうか?アルバム」

「え、ホント?貸して」

やった、これでまた二人で会える〜

なんかさっきまでの嫌な空気もなくなつたし、岳ちゃんに感謝しなきゃ。

会ったらお礼言おうつと

「朱なんか飲む?」

「ん〜一緒に買いに行く」

気付くと車は駐車してあつて、他にも車が沢山止まつてる。  
目的地 なわけないよね?

「パーキングエリア。修学旅行とかでバス止まつただろ?」

あ、確かに止まったかも。  
行きは朝早くて、帰りは疲れちゃって、結局下りたことなかったけど。

「パーキングエリアってこんな感じになってるんだあ〜」

なんかとにかく駐車場がいっぱい。  
トラックとかバスとかもいっぱい。

「ここなんて狭い方だぞ？中には小さい遊園地ついてるトコもあったし」

「え〜！遊園地!?!」

遊園地って え？

だってパーキングエリアってただの休憩所だよね!?

「今度行ってみる？」

「行くっ！行ってみたいっ！」

わあ〜い

パーキングエリアなんて誰かの車じゃなきゃ行けないし。

「朱美…ガキっば…」

いーんだよーだ。

なんかクスクス笑ってるようちゃんを怒る気も失せるぐらい機嫌いーんだもん

「私の方がようちゃんより早く生まれてるんだからねっ」

私は5月だけどようちゃん8月だもん。  
私の方が年上なんだよ？

「精神年齢の事だから」  
「むうー」

膨れて見せるけど多分ようちゃんはわかってるんだろっな。  
私が全然気にしてないこと。

確かに早く生まれたけど、年上っぽかった事なんて一回目もないし  
ね。

霞にもよく世間知らずってよく言われるし。

「ほら、何飲む？」  
「ん〜午後ティー」

ガコンって音がして出て来たペットボトルをようちゃんが手渡して  
くれる。

「え」  
「ん？アイスだろ？違った？」  
「え、あ…うん、ありがと。よくわかったね？私アイス飲みたいな  
んて言わなかったのに」

季節からか友達に頼むとまずホット買ってくるのに。

「昔から飲み物でホット飲まないじゃん、朱は」

確かに昔から飲まなかったけど…ようちゃんが知ってる私なんても  
う12年も前だったから。

「覚えてると思わなかった」  
「ばーか。忘れてねーよ」

そういつて笑った顔が凄くカッコよく見えて…。  
あ、勿論普段からカッコいいとは思ってたよ？  
でもなんだか、なんていうかな？

それ以上にカッコよく見えるの。  
多分視覚を映像に変換する時に色でも付けてるんだと思うけど。

「朱？何ほつけてるんだ？ほら車戻るぞ？」

「あ、うん」

まさか見惚れてた　なんて言えないよね　、絶対…。  
前を歩くようちゃんは後ろを振り向くことなく歩いてく。  
昔からの癖で、こういう時はようちゃんの一步後ろを歩く。  
躓いても気付かれなしね。

覚えているようちゃんの姿では私とあんまり身長変わらなかったの  
に…今じゃ私の身長はようちゃんの首までもない。  
ちよつと悔しかったりする。

(ようちゃんは私の気持ちなんて気付かないんだろうなあ)

気付いて欲しいような…欲しくないような…微妙な気分。  
むうー。

一人でこつやって悩んでるんだと思うと……なんかムカつく。  
勿論逆恨みだとは思っただけど　それは動いた後の事。  
もう少し距離を置いてから、やや勢いをつけての突進はようちゃん  
のバランスを崩すくらいだったけど、澄ました顔が崩せただけで気  
分が晴れる。

霞に猪突猛進だと言われるわけだよ、うん。

勿論ぶつかつた勢いそのまま車までダッシュ。

と思つてただけだ…。

後ろから迫る足音はすぐに距離を縮めて。

(追い付かれるっ!!)

と思つた瞬間にはガクンと後ろに引かれる感覚があつて。

「あゝけゝみっ!!」

「く、苦しいつてばっ」

後ろから羽交い締め。

足まで早くなつたか…つてリーチ長いんだから当たり前か。

んゝなんで気付かなかつたんだらう。

なんて悠長に考えながらも羽交い締めは揺るまなくて…。

でもちよっぴり嬉しいと思うのは理由はどうあれ相手がようちゃんだからだらうか。

「朱美ゝほら謝れ。危うくこけるとこだつたるおゝ?」

「こければ楽しかつたのにいゝ」

「あん?」

げ。

口に出てたらしい。

その後羽交い締めされたまま引きずられるように車まで連れていかれたのは 言うまでもないかな。

## 5 パーキングエリア（後書き）

毎日2話ずつ更新いたします。全部で9話構成になっています。

## 6 ・大切な場所（前書き）

本日も2話更新しています。始めに《5 ・パーキングエリア》をお読み下さい。

## 6・大切な場所

やっと目的地である地元についたのはそろそろ昼になるって時間帯。  
だから。

「遅い！」

って言われてもまあしょうがないんだけど…。

「いーじゃねーか、混んでたんだから」

ようちゃんってば…平然と嘘ついてるし…。

結局パーキングエリアに30分以上いたしなあ。

あ、でも言うなって言われてるんだっけ。

「…目が泳いでるぞ、朱美」

「…え、な、なんの…」

「お前相変わらず嘘下手だなあ」

なんで皆私が嘘付いてるってわかるのかなあ。

霞に限らず友達全員百発百中っていうのも…どうかなあ。

しっかし…確かに会わなくなって10年近く経ったけど…岳ちゃん身長伸びすぎだから！

むうー3人仲良しこよしの身長伸びてたはずなのに…いつ頃から私だけこんな低くなったんだろう。

くやしいなあ。

ようちゃんの隣にいても全く違和感ないのは小さい頃から一緒だったからか…それともようちゃんに負けず劣らず整った顔立ちをして

いるからか…。

ん〜、二人とも私と駆けずり回って泥んこになってた仲間だったはずなのに…。

…あ、私だけ？

垢抜けてないの。

今度から霞の言うことに耳傾けようかな…。

「しっかしお前クリスマスに呼び出すとはいい度胸だよなあ」

「ふっ、それで来るお前もなw」

「んで？なんだ？頼みたい事って」

「プレゼント買うの付き合えよ」

「はっ！？おまっ それだけの為に呼び出したわけ！？」

「だってお前今年暇だって言ってたじゃんか」

あ、なんかようちゃんが何も言わずに威嚇してる。

この二人って見てると楽しいんだよね、昔から。

相容れなそうな感じな癖に息びったりだからなあ。

「んで？どんな奴なん？」

「ん。あの子だよ」

「は？あの子って言ってもわかるわけ… ってもしかしてガキの頃の？だってお名前しか知らなかったじゃねえか」

小さい頃？？

っっていうと…よく公園に居たあの子かな？

3人で遊んでてもあの子見つけると岳ちゃんあの子のそこ行ってたしなあ。

「まあホント偶然。お前らと一緒にだよ」

「っつか待てよ？なんでわざわざこっち呼び寄せた？お前だって都

内幕らしだろーが」

「まあそれはちょっと…ね」

「なんだよ」

「しらねーの？最近この辺りよく紹介されてるじゃん」

あゝ、そういえば。

なんか大きなショッピングモールが出来て、そのイルミネーションがすごい綺麗らしくてよく中継入ってたかも。来ることないと思ってたから聞き流してたけど…。

「なあ朱美？」

「え、あ、うん。あんまり詳しく見てないから詳しくはないけど、そんな特集してたね」

急に振られるとは思ってなかったからビックリしたよ。また顔に出たのかなあ？

「ふーん。で？何買った？プレゼント」

「あゝそれは…」

ん？

何？

なんで私見てるの？？

「陽輔は買ったのか？」

なんでそこでようちゃんなんだろう？

あ、でもそれ知りたい。

あげる相手いるのかなあ？

あ…私せっかくクリスマスだっていうのに…プレゼントなんてすっ

かり忘れてた！

どうしよう…。

「俺の事は…どうでもいいだろ」

だからなんで二人して交互に私を見るんだってば。  
私なんも発言してないよ？

「へえ。ま、お前でも苦勞することあるんだな」

「…なんとでも言え」

ん〜、なんなのがよくわからないけど…。  
話がわからないから…つまんない。

「ようちゃん、岳ちゃん。懐かしいしちょっと向こう行ってくんね」  
そついつて背を向けた私に向かって、

『迷子になるなよー』

つて…幼馴染二人に揃ってそついわれる私って…。

「…そんなに方向音痴じゃないやい」

なんてつぶやいてみたって絶対二人には聞こえてないとは思っただけど。

今年のエイプリルフルにも一度はここに来たけど、あの時は突然の再会でバタバタしてたからあんまりゆっくり見て回る時間なんてなかったんだよね。

10年間お世話になった土地。

エイプリルフールの時には全然気付かなかったけど、町並みにあまり古さを感じなくなっただなあ。  
なんたる？

近代的になっただって言えばいいのかも知れないけど…。

(昔の方がいいなあ)

なんて思っちゃう私はちょっと町の発展を考えなさすぎ？？  
ん〜でもなんか…古いつていうか赴きのあるあの町のがしっくり来るのはそういう町で育ったからかなあ。

確かに見慣れた感じなんだけど…近代的ってちょっと冷たい感じがするんだよね。

なんか古い建物の方が温かみがあるっていうか…。

ん〜、なんなんだろうね。

歩く足は自然に自分の家があった方へと進む。

生まれてから10年間育った家。

人に売っちゃってそのあとどうなったのか見てないんだよね。

春の時はそんな暇なかったからなあ。

駅からは近いから二人に怒られることもないだろうし。

(えーっと、ここを右であそこ左に曲がった角だよな)

小さい時は何度か道を間違えて家にたどり着かなかったことも何度か…。

父さんがよく探してくれたみたいだったけど、何処にいてもまず私のこと見つけるのはようちゃんだったんだよなあ。

あの辺りから多分幼馴染以上になっただんだと思うけど…。

(あ、ここ…)

駅から歩いて5分足らず。

心躍らせて歩いて来た場所にあったのは 何も無い空き地。

(そっかあ、壊されちゃったんだ)

なんか…ぽっかり穴が空いたみたい。

確かにここに私の家があって、皆でワイワイしてたのに…。

今は私の家でもないし、全然違う人の土地だっていうのはわかっているんだけど…。

(ちよつと…残っててほしかったなあ…)

例え自分の家でなくても…。

物心付く前から住んでた家。

ようちゃんの家とは違って私の所は父さんの転勤で引っ越したただけだから、変わったのはホントに家だけなんだけど…。

それでも…10年という歳月を過ごした家がないのはどこか寂しくて。

「 朱美? 」

そう耳元で呼ばれるまで呆然とその前に立ってたんだ。

「 あ、行く? 」

振り向いた先にはようちゃんと岳ちゃんがちよつと心配そうに私の事を見て、次に何もなくなつた空き地に視線を移す。

「 ん、ああ、…家、取り壊されちゃったんだなあ 」

「 ん、そうみたい 」

「ま、家がなくなっても朱美が忘れない限りはここは俺達の地元だろ？」

「…うん」

なんでだろうね。

さっきまであんなにも寂しかったのに…今は温かい。

家がなくなっても、私はここで育った

そうだよね。

私はここで10歳の誕生日を迎えたんだ。

家がなくなってしまうても…私は覚えてるから。それでいいよね。

「んで？何処行くの？」

「ああ、シヨップिंगモール行くつもり。二駅先らしいしな」

そついいながら私は空き地に背中を向ける。

私の生まれた家。

私が育った家。

たくさん思い出が詰まった家。

そして…なくなってしまう家。

でも…、大事なことを教えてくれた家…。

「…ありがとう」

チラリと振り返った時に小さく呟く。

隣を歩く二人にも聞こえないぐらいの小さな声で。

「朱？なんか言った？」

「うづん、なんでもないよ」

きつとまた来るね。

私の育った大切な場所に。

## 6 ・大切な場所（後書き）

明日は3話更新いたします。全部で9話構成になっていて、明日はいよいよラストまで。楽しんで頂けるといいのですが）、）、（

## 7. プレゼント

(ん)、男の子も買い物長かったりとかするんだ…)

なんて備え付けのベンチで何度思ったことか。

新しく出来たというショッピングモールは田舎で土地が広いだけあってかなりの店舗が入っていてちよつと圧倒された。都会は狭いところに所狭しと並んでたりするからなあ。

通路がものすつごく余裕を持って設計されているのは田舎ならではのと思う。

かれこれショッピングモールに来てから早2時間。

ショッピングモールまで来たはいいんだけど…。

(岳ちゃんにようちゃん取られちゃったよ…)

一人だけ置いてけぼり。

なんだか女の私がいると不都合らしい。

…クリスマスだっていうのに一人残されるってどおよ？  
周りを通るのはカッパルばかり。

「……………」

確かに一人だけ女の私って邪魔かもしれないけど…。

(女の意見聞こうとか思えないわけ!?)

って考えてもみても私がプレゼント探しに役立つとは自分でも考えられないから…まあしょうがないか。

手当たり次第ってわけじゃないけど、いくつかのお店回ってみたり

はしたけど…。

(霞いないと選べない私って…)

どうしても今までどおりの服装になっちゃう。

イコール霞の言葉を借りるなら女の子らしさが足りないらしい。

まあ、帽子で髪隠してる時に逆ナンされたり…とかあったけどさ…。

…やっぱりちょっとは霞の助言聞こうって…。

赤い風船を持ってはしゃぐ女の子だったり、走り回る男の子。

シヨッピングモールっていつでもファミリーで来る人が多いみたい。

駐車場広かったし…この辺りほかに何も無いからそんなものなのかなあ。

色とりどりのリボンでラッピングされたプレゼントを持った男の子がはしゃぎまわってる。

(…あ、ようちゃんのプレゼント…)

ようちゃんも岳ちゃんも見える所には居ないし…。

携帯電話を手に取ると慣れた手つきでボタンを押す。

TO：小野 陽輔

ちょっとブラブラして

るから終わったら教

えてねー。

『送信完了』の文字を確認するとベンチから立ち上がる。  
買おうと思ったものは頭の中では一つ。

目的のお店に着くとウィンドウの中を覗き込む。  
あんまりブランド物には興味がないからこういうのってよくわからない。

でも、前に『財布が壊れた』って聞いたことがあって、パーキング  
で見たときの財布も変わってなかったから多分まだ買ってないはず。  
だからプレゼントはお財布。

いつもポケットにいれて持ち歩いてるからあんまり分厚いのは却下  
だし、長財布は持たないみたいだからそれもなし。

ずっと使ってほしいからしっかりと買ったものがいいよなあなんて事を  
思いながらウィンドウを回っていると。

(あ、あれ、ようちゃんに合いそ…)

見つけたのは二つ折りの皮財布。

とてもシンプルでどんな格好の時でも違和感がなさそうなデザイン。  
大きさも多分今ようちゃんが持つてる財布とあまり変わらないと思  
うし。

(…あ…バイト真面目にやっけてよかったかも…)

値段を見ると一応手持ちのお金で買えるし。

「すみませーん、この財布お願いします」

「コチラですね。プレゼントですか？」

「あ、はい」

綺麗な店員さんに案内されてお会計を済ませ、綺麗に包装された商品を受け取るとなんだか一気に恥ずかしくなる。

(…買った…)

プレゼントが持つてる鞆の中にすっぽり入る大きさだったのはよかったかもしれない。  
そんなことを思っていると鞆に入れていた携帯が着信を告げる。

「ようちゃん？」

「朱々？こつち終わったけど今何処にいんの？」

…ここにいるとは言わない方がいいよなあ。

「ようちゃん達こそ何処にいる？」

「最初に別れたベンチのトコだけど」

「んじゃそこまで戻るねー、5分ぐらいで着くと思う」

「迷うなよー」

「くどいってばw」

携帯を切ると買ったプレゼントを鞆の置くに見えないようにしまいかむ。

(果たして渡すことなんて出来るのかな)

なんて思いはするものの待たせたくないで慣れないヒールで頑張っ  
って歩く。

そんなに目指したお店が遠くなくてよかった。

「何か買った？」

「え？あ、ううん…」

ついそういった言葉を肯定してもらおうと岳ちゃんに助けを求めるが…。

「朱美…お前嘘つけないんだから諦める」

あいにく通じなかったらしい。

「ちょっと小物…って、そんなことよりプレゼント何にしたの？」

「内緒w」

「えー！ずるい！私には聞いて！」

「それは朱美が嘘つけないだけだろー」

そんな感じで岳ちゃんとじゃれてるとガシッと後ろから本日二回目の羽交い絞めを受ける。

「ようちや…」

「お前時間ないんだろ？」

「そうだった、んじゃ、朱美また三人で遊ぼうぜ。俺これからデートだから」

…なんだろ…そういうえば昔もあの子のとこ行く時の岳ちゃんって年相応に見えたっけ。

ってか、ここまで人のデート邪魔しといてデートかあ。

…いいなあ。

「ほら、朱、ぼーっとしない！俺らも行くぞ！」

「え？何処に？」

岳ちゃんとの別れを惜しむ暇もなく強引に歩き始めるようちゃん。

「東京」

「…って帰るだけじゃなかあ」

イルミネーション綺麗だっというんだから見て行くのかと思ってたのに…。

でも私の抗議の声なんかまったく聞かず、どんどん歩いていくようちゃんに引つ張られるような形でショッピングモールを後にする。

「こつちよりも回るとこは一杯あるし。ってか、予約に間に合わない

く…」

「…予約？」

何それ？

聞いてない。

何か予約したの？

「あ…つと…なんでもない」

あ、視線そらした！

しかもあからさまに！！

なんかあるんだきつと。

「ねえ予約つて??？」

「なんでもねえーつてば」

「ねえねえ！」

「なんでもねえーつて言ってるだろ！」

「そんなことない！絶対何か隠してる！」

なんて会話をしながら半分以上追いかけてっこみたいな感じで私達は  
朝来た道をトンボ返りしたんだ。

## 8 甘いもの(前書き)

本日は3話更新しています。《7 プレゼント》からお読み下さい。

## 8・甘いもの

「うっわー、可愛いレストラン」

やって来たのは東京からよつと離れた郊外にある洒落たレストラン。個人経営みただけどすつごく落ち着いた雰囲気のお店で、周りは落ち着いた感じで森の中っぽい。森の中のレストランって感じ。

「いらつしゃいませ。ご予約ですか？」

「予約していた小野です」

あ、予約ってこのことだったんだ？

結局こつち帰ってくるまでの3時間教えてくれなかったから何かと  
思ってたけど…。

「はい、小野様ですね。あちらの窓際の席にどうぞ」

案内されたのは一番奥まった所にある席。  
家族で食ベにきてたり、カップルがいたりで結構満席。  
空いてる席にもなんか置いてあるから…。

（全部予約席なのかなあ？）

って、そんなわけないかあ。  
決まったの4日前だもんね。

「まさか本当に来るとは思わなかったよ、陽輔」



さつきからドキドキしっぱなし。

「さつさと仕事戻れーサボリ魔」

「へえ、そんな事言ってるいいんだあ？」

健司さんの顔が近づいて内緒話をするくらい近くになる。

ようちゃんといい、岳ちゃんといい、健司さんといいた顔してるよなあ。 ホント整

類は友を呼ぶっていうのかなあ。

「朱美ちゃん、こいつね…」

「わあ〜!!!!!! わかった、わかったから余計なこと言っなよ!?」

健司さんの囁きをようちゃんの声がさえぎってよく聞こえなかった。何を言いたかったんだろう？

健司さんのことを見上げると柔らかく微笑むだけで交わされてしまっし…。

あ、きつとようちゃんからかっただけだ。

なんかそんな感じがする。

整いすぎてちよつと怖い印象だったけど、雰囲気がとても温かい。

私の方に微笑んだ健司さんは逆にようちゃんの耳元に何か言ったかと思うと、

「ぜってーさせねえ」

つてちよつと凄んだようちゃんに追い立てられるように調理場へと去っていった。

なんかその時のようちゃんが本気なのはわかるんだけど…健司さん何言っただろう？

ようちゃんがこんな顔するの滅多にないのに。  
って、私知ってるのは8歳までのようちゃんだったけど。

「健司さんようちゃんになんて言ったの？」  
「…知るか」

あゝ、なんかご機嫌斜めだよ。  
なんなんだろ？

気になるけど…ほとぼりが冷めたぐらいに聞いてみようかな。

「朱ワイン飲める？」

「え？んゝ、一応飲めるけどいいよ、ようちゃん飲めないでしょ？  
車だし」

「じゃあ何飲む？」

「んゝメニュー見せて？」

なんかメニューまですっごく上品…。

…女同士で飾らないとこ行き過ぎなのかなあ…きつと。  
なんとなくようちゃんがめかしこんでこいって言った理由がわかつた気がする…。

こんなとこジーンズで着たら…浮くよね…絶対。

「オレンジでいいや」

「ん、すいませーん」

なんだか注文したりする姿がすっごく自然で気負ってなくて、ようちゃんはこついうところよく来るんだろっなあって思える。

( やっぱり彼女とかと来たのかなあ )

メニューを指差しながらスムーズに注文を済ませたようちゃんがこつちを見て首を傾げるから、こつちからも首を傾げる。

(あれ?)

ようちゃんの顔が赤くなったのはなんでだろう。

お酒も飲んでないしなあ。

後ろに綺麗な人でもいるのかなあって思って後ろをチラリと振り返ってみてもそこはただのビアサーバーがあるだけだったりする。

なんで赤くなるかわからないまま視線を元に戻すと赤くなったと思つたのが幻みたいに普通の顔にいるようちゃんの姿。

私を見て笑つた顔はさっきまでちよつと悪そうだった機嫌が直つたみたい。

(なんかあつたのかなあ?)

そうは思うものの思い当たるものなんて何にもなくて。

前菜、スープ、魚料理、肉料理と運ばれてくる料理はどれもとても美味しい。

美味しい料理だと会話が弾むっていうのもホントだね。

食べてる時間の方が少ないんじゃないかってぐらい色んなことを話した。

傍にいた小学校の時の事。

離れた後の中学校、高校のこと。

お互いの家族の事。

兄弟のこと。

そして受験のこと。

今の事など。

時間がいくら合っても足りないんじゃないかってぐらいポンポンと出てくる話題はさすがって感じ。

小さいときから一緒だったからか話のテンポも合つし、話していて本当に楽しいって思った。

まあきつとようちゃんだったから　って理由もあるのかももしれないけどさ。

あ、でも、何故かお互いに恋愛の話しには触れなかったけど。

ん〜、やっぱりあんまり聞きたくないよね。

興味はあるんだけど…比べちゃいそうだし。

ようちゃん今好きな子いるのかなあ…。

「こちらデザートになります」

そういつて出てきたのは雪が降りかかった綺麗なケーキ　ブッシユ・ド・ノエル。

ノエルがフランス語でクリスマスなんだって言ったのは甘いものに目がない霞だったかな。

可愛いサンタとツリーの飾り　って、これもしかして飴細工？

「可愛いだろ？」

「うん」

ハッキリいってお菓子は自分でも作る方だから結構煩いらしいんだけど…このケーキほんとに綺麗。

雪に見立てた粉砂糖がまだらで、まるでホントに倒れた木に雪が降り積もつたみたい。

「お気に召しました？」

視線を上げた先に居たのは健司さん。

次に聞こえた言葉は…健司さんには悪いけどかなり衝撃の一言。

「ここでパティシエやってるの健司なんだぜ？」  
「……………」

開いた口が塞がらないって言うのはまさにこのことだと思う。  
ほんと、口開いてることを意識できないんだもの。

(ゴメン健司さん。普通にコックさんの方だと思ってました)  
とはもちろん声には出せないけど。

「どう？結構上手いでしょ？」

なんだかビックリしすぎて首を立てに振ることしか出来ない。  
でも…これ、もう上手いなんてレベルじゃないと思う。  
職人技…だよな。

74

「健司さんパティシエだったんですか？私てつきり大学生かと…」  
「よく言われるけど初めに思った通りの大学生だよ。陽輔と同じ大  
学、同じ学部だし」

「え？じゃあ…」

「この店俺の両親がやっててね。ガキの頃からよく作ってたから。  
親孝行みたいなもんだよ」

「…親孝行でお店が出せそうですね」  
「ありがとう」

微笑む健司さんがすっごく大人に見える。

( 私も親孝行しなきゃ… )

って、思っするんじゃないかっていつも出来るようにしなきゃなんだ

けど…ね。

ふと気付くとようちゃんがまた不機嫌そうな感じで、それを見て健司さんがちよっと笑って私の耳元に顔を寄せる。

「陽輔も甘いもの好きだからなんか作るなら教えるよ…?」

なんて囁いて、そのまま調理場に戻ってく。

ん〜、カツコイイ人だよなあ。

あ、でも今日ってクリスマスだよね??

彼女居ないのかなあ?

「ねえ、ようちゃん、健司さ…」

…なんか…これ以上言っちゃいけない気がする。

なんか…似たような悪寒をつい最近感じた気がする…。

目の前のようちゃんは先までの不機嫌そうな顔が嘘のように笑っていて。ただし目元以外は…。

…目が怖いよようちゃん…。

きつと幼い子が今のようちゃん見たら…泣き出すね、きつと。

(あ、寝起きの霞に感じた逃避本能に似てるんだ、きつと…)

本能に従うまま私はそこで言葉を止めて、美味しそうなケーキに手を伸ばす。

一口分をフォークで切って。

「ようちゃん?」

と、機嫌の悪そうなようちゃんの口元にフォークを持っていく。健司さんに言われなくてもようちゃんは昔から甘いものが好き。

まあだからお菓子作るようになったんだけど…ってそうなんだ、私。  
どんなに機嫌悪くても甘いものを与えればなんとか機嫌直るんだよね、昔から。

「いらない？」

なかなか口を開けてくれないから伸ばしている腕が痛くなる。  
ん〜、もうちよつと何か運動しなきゃダメかなあ？

ジムの回数増やそうかなあ。  
なんて考えてたら。

パクッ。

とフォークに乗せたケーキが消えて私も伸ばしていた腕を戻す。  
さて、ようちゃんの顔は…っと。

（よかった、機嫌直ったみたい）

ようちゃんは鋭かった目がほにやって感じになって幸せそうな笑みを浮かべてる。

（ホント甘いもの好きなんだなあ）

「おいし？」

「ん」

あはは、なんか可愛い。

食後の紅茶を頂いた頃にはお店に来てから既に3時間が経過しようとしていた。

(もう9時かあ)

まあ22日が最後の授業でもう冬期休暇だから関係ないっちゃ関係ないんだけど。

あ、すっかり忘れてたけど…プレゼント渡すんならあと3時間後かあ。

鞆の中にある綺麗に包装されたプレゼントだけど、…渡せるのかなあ。

「朱、そろそろ行くぞ？」

「あ、はい」

鞆からお財布を出していたら、ようちゃんったらその体制のまま私を扉から追い出す。

(…健司さんにお礼いいかったのになあ)

ようちゃんがああいう感じの時は多分何をいっても聞かないから素直に駐車場に止めてあるようちゃんの車へと戻る。

都内よりもちよっと郊外にあるせいかな、余計な明かりが少なくてもより星が見える。

吐く息が白いくらいには寒いみたい。

あ、そっか。

いつもと違ってスカートだから余計に寒いのかな？

コートの襟元をちよっと立てて風除けにする。

風が吹くと寒いけど、木々のざわめきがなんだか心地いい。

「お待たせ、乗って？」

冷え切った車の中に乗り込むとお財布から適当に掴んでようちゃんの胸に押し付ける。

なんか…奢られるのって好かないんだよね。  
なんだけど…。

「いらない」

って着き返されてしまったから、朝携帯が入ってた小物入れの中にも潜ませようと思って財布にしまっ振りをしてコートのポケットに突っ込む。

エンジンがかかるのと同時にオーディオから曲が流れてくる。

ようちゃんは運転に集中しているし、小物入れあけるときの微かな音は音楽で聞こえないだろうし…。

（今かな）

そっとなに忍び込ませておく。

今度会ったときに怒られるかもだけど…ま、いいよね。

何処に行くかを聞いても答えてもらえないまま、車は街中の明かりを目指して進んでいった。

## 9 イルミネーション(前書き)

本日は3話更新しています。《7 プレゼント》からお読み下さい。

## 9・イルミネーション

やって着たのは東京駅。

車をその辺りのパーキングに止めると、ようちゃんに手を引かれながら歩き出す。

(そういえば今年なんかイルミネーションあるんだって特集してたなあ)

両脇のライトアップされた街路樹が綺麗に煌めいている。

先程見かけた星よりも綺麗だと思うのは、綺麗な星空を見たことがないからかなあ。

レストランをでてからずっと、ようちゃんは一言も喋らなくて、見上げた横顔はいつも凛々しい感じで　イルミネーションと浮かれた街の雰囲気のせいかな？

んゝ惚れた弱みって奴も入るのかな。

「ついたぞ」

ようちゃんにそう言われるまで、何処に向かっているのかもわからなかったけど…顔を上げた先には照らし出される噴水の明かり。

「…キレイ」

三つ並んだ噴水が色を映し出す。

赤だったり、紫だったり、青だったり、緑だったり。

変わる色ごとにその場の雰囲気が変わっていく。

水が間接証明の役割をして優しく辺りを照らし出す。

「昔っからこういうの好きだったろ？」

「うん、……ありがとう」

もう何年も経つのに ホントよく覚えてるなって思う。

あの頃毎日丘の上の木に登っては、変わっていく空を飽きる事なく眺めて過ごした。

毎日毎日色が違ったから 飽きることなんてなかったんだ。

ああ、今日は赤が強いなあ〜とか、今日は薄い橙色だなんてよく喋ったっけ。

あ、そういえば…。

「ねえようちゃん。実はあの時あんまり色の名前覚えてなかったでしょ？」

あの時いつも空返事だったもの。

あの時にはもう好きだったから、言ったことはなかったけど。

「…さあ？覚えてねえや」

「そっか」

まあ、いいんだ。

なんとなく気になっただけだしね。

私の事を見ることもなく答えるようちゃんの横顔をみながら、心の中ですっさと囁く。

（私ね、ようちゃんの嘘だけは人よりもわかるつもりだよ？）

だけどさ、今ちよつと嘘ついてる風なのは見逃してあげるw

昔のことだしね。

あの頃の私達には…っていうか、ようちゃんには性別なんてなかつ

たし。

それにしても…やっぱり冬って寒いなあ。

この間まではまだ暖かったのになあ。

寒いと思ってしまうと、どうしても感覚が鋭敏になってしまつみたいで間髪置かずに身震いが起こる。

(せめてマフラーでも持ってくればよかったかなあ)

そんな事を思っているとふわっと肩を抱かれて引き寄せられる。

「んな格好だと寒いだろ？なんで今日に限ってそんな服着てるんだよ」

頭のすぐわきで聞こえる声に別の意味で体温が上がるのを感じる。気付いた時には引き寄せられて、腕の中にすっぽりと入ってしまったている。

「めかし込んで来いって言ったのはようちゃんでしょ？」

さっきまで感じてた寒さがなくなる　なぐんてことはないけど、風の通らない背中がほんのり温かい。

「んな服着て来たことないだろ」が

確かに…春から何回かようちゃんと遊んだ時なんてジーンズにTシャツ　なんてラフな格好だったけど…さ。

「…友達に見繕って貰ったんだもん」

やっぱりクリスマスだよ？

ちょっとは…女の子っぽくなりたいじゃん。

「まあ、…似合ってるからいいけどな」

自分のすぐ近くで白い吐息が空気に還って行く。

一瞬言われた言葉が理解出来なくて…、でも理解し始めると嬉しさが倍増する。

『なんて単純なんだろう』なんて、禁句だよな？

好きな人にそんなこと言われたら嬉しいの当然じゃない？

何度でも言われたいなって思うよ。

だから…。

「…ホント？」

聞き返してしまう。

もう一度聞きたいから。

「…こういうことで嘘つかねえよ」

思いつきり首を後ろに回すとようちゃん顔が見える。

振り向いたホントに近くにようちゃんの顔がある。

「ホント？」

「だ〜か〜らあ〜」

困ったような顔で私を見るようちゃんに嘘ついてる感じは見られない。

「ホントね」

すっごくいい顔で笑えてると思う。  
だって、こんなに嬉しいから。

ボン、ボン

何処からか鐘の音がする。

腕時計がクリスマス・イヴが終わったことを指し示している。

『Merry Christmas !!』

同時に同じ事を言ったことに二人してクスクス笑って。

「ちょっと待ってて？」

そういつて回していた腕を放したようちゃんは胸ポケットに手を入れる。

腕の中から抜けてから、ようちゃんがわざわざ風を避けてくれた事に気付く。

(ようちゃんだって寒い癖に…)

カサッと、鞆の中に入ったプレゼントが音を立てる。

ようちゃんの為に買ったクリスマスプレゼント。

「なんだかプレゼントに『まだ、渡されてないよ?』って抗議されるみたい。」

鞆の底にしまったはずなのに、今はもう鞆から見えるところにある。手を伸ばして触れるとひんやり冷たい。

「え?」

急に目の前を何かが通り過ぎて、ようちゃんの吐息をまた近くに感じる。

「こら、ちょっと動くな、止められないだろう?」

振り向こうとするとようちゃんに背を向けたまま固定される。首筋に触れる温かい手と、冷たい何か。

「ほら、出来た」

時間をかけることなく、ようちゃんの気配が背後から離れる。手を首に近づけるとひんやりとした感触が指に伝わる。

「Merry Christmas 朱美」

その言葉に、それがようちゃんからのクリスマスプレゼントだと知る。

めちゃくちゃ嬉しい時って、声が出ないんだね。

言いたいことが言葉にならなくて でもちゃんと伝えたくて。

目に付いたのは鞆の中のプレゼント。

まだ渡されていない赤い包み。

鞆の中から取り出してそろそろとようちゃんに差し出す。

「俺に?」

答える代わりに頷いて。

「開けていい?」

その言葉にも首を縦に振る。

包みを丁寧に取り去っていく音に鼓動が高鳴る。  
確かにようちやんに似合うと思って買ったんだけど、それをようちやんが気に入るかなんてまた別の話だし。

「…あ」

…聞きたいような…聞くのが怖いような…

「財布じゃん！覚えてたんだ？前にちょっと言ったただけだったのに」  
「…え、あ…うん」

チラッとようちちゃんを見ると結構嬉しそう…。  
気に入ってくれた　のかな？  
ちよつと安心。

「大事に使うから。サンキュ」

なんか…その顔見られただけで満足かも…w  
ん〜、全部クリスマスマスのせいにしちゃおうかな。  
こんな風に思うのも、こんなにも気持ち伝えてしまいたいのも…。

「ねえ、ようちちゃん」

「なあ、朱美」

せつかく決心したのに、こうやって二人して切り出すタイミングが  
一緒なのはなんだろう？

やめた方がいいってサインなのかなあ？

…まさか、違うよね。

「あ、何？ようちちゃんからどうぞ？」

「いや、朱の方からでいいよ」

「ううん、ようちゃんの方からで…」

「もう、二人同時にしよっか」

「そうだね」

ようちゃんは何を言うんだろう？

私はもう、決まってるけるけれど。

『せえーのっ』

心臓のドキドキがすごく煩い。

でも、なんだろう。

すごく言ってしまいたいから。

だからね。

『好きです(だ)』

まさか、重なるなんて思わなかったよ。

同じこと思っていたなんて。

こんなに嬉しいことってないよね。

驚いた次の瞬間には、二人してクスクス笑ってた。

その後話したんだ。

お互いの恋愛話。

ようちゃんは話したくないみたいだったけど、ポツポツと色んな話をしてくれた。

いいことばかりじゃなかったし、ようちゃんのいうことにはいちい

ち驚いたけど…（付き合っただけでも身体の関係があった…とかって奴に　ってか、顔すっごく赤かった見たいで何度も笑われたけど）全部話した後に、ようちゃん約束してくれたから。全部話してくれたから、もういつかなってw  
もしもなんかあったその時は…霞という強い味方がいるしねw

来年も再来年もず~~~~~と、一緒に居られるといいな。

『Merry Christmas ! ! ! ! !』

## 9・イルミネーション（後書き）

これで一応完結となりますが：続編に陽輔バージョンを執筆しています。（いつアップするかわからないけど）ってことでいつかはアップされるかも？（笑）またお会い出来たら光栄です。ではまた。

＼（＊　　　　　　）＊See You＊　　　　　　＊（ノ

【陽輔編】 1・約束（前書き）

まだ書き終えていないので更新はとも遅くなりますが…（別話も書いてるので）、付き合っていただけでも嬉しいです。

【陽輔編】 1・約束

「頼むっ！！この通りっ！！頼むから来てくれよ」

「い・や・だ」

いったい何回発したかわからない言葉をもう一度発する。

いくら拝み倒されたって乗り気じゃないんだからしよーがないだろ。

「お前ホント遊ばなくなったなあ」

「うるせえよ」

必死に拝み倒すダチの横で結構長い付き合いの部類に入る健司ケンジが感心したようにポツリという。

俺にだって自覚はある。

週末にはクリスマスだっていうのに彼女がいないのは 高校以来初めてじゃないだろうか。

どっちかっていうと俺は遊び人と言われる部類に属しているし、見た目だけならそうチャラチャラはしてないが 遊んでたのは確かだ。

彼女いながら身体の関係になった女だっていたし、合コン行って成り行きのままっつー行きずりの関係も結構あったし。

今までの彼女は好きだったとは思って 全くと言っていいほど執着はなかった。

まあだからこそその時の気分のみで行動してたんだけど って、あゝホントどうしようもないぐらいバカやってきてるんだよなあ俺。

それなのに ここ一年、女に触れた記憶がねえんだからダチも驚くよな。

「女か？」

「さあね」

コイツ等も遊び人とか言われる部類だから、女だとかいったら会わせろって煩いだろうしし　俺らしくないとは思いつつ…会わせたくねえ。

って言っても　彼女でもないんだが…  
彼女と再会したのはホントに偶然だった。

実家であの古い手紙を見つければ彼女の事など思い出すこともなかっただろう。

それなのに、8つの時まで幼馴染みとして一緒に育った少女の姿しか知らなかった俺は、急に成長したかのように目の前に現れた彼女に　一目惚れしたんだ。

昔と変わらないあいつの笑顔に。

なんて事こいつ等に言えるわけねえよなあ。

それから連絡を取り合うようになって、近くに住んでいることを知った。

今までの私生活を知られなくて、曖昧な関係が続けていた女達は全部切った。

数人に顔ひっぱたかれたけど…そういう生活を送っていた報いだって事で甘んじて受けといた。

痛かったなあ、ありや。

まあその痛みを代償に晴れて綺麗な身となったわけだけど　こんな私生活だったからか、あいつとの接し方がわかんねえ。

話して見ると俺とは違って真っ直ぐ育ったみたいだし　。

（俺なんかが手を出しちゃいけない気がすんだよなあ）

女に対してこんな風に思ったのは生まれて初めてで、今までの生き

方を後悔　はしないけど、もっと節度持った生活してたら　と  
思ったりはする。

それに彼女と再会してから1番気を揉むのは　彼女に想う相手が  
いるっぽいって事。

彼女の口から聞いたわけじゃないから気のせいである可能性もある  
けど……、最悪な事に俺この手の勘が外れたことないんだよな…。  
なんか凹んできた…。

「…切ねえ…」

「うつわ、お前　かなり重症だな」

「合コン行ってパーツと騒げばいいじゃん!!」

俺の呟きに健司は嬉しそうな顔をし、敦はしつこく合コンを持ち出  
す。

「んなどこ行くかよ。ウゼエし」

あいつ以外と居たって楽しく感じねえし。

昔バカやってた自分が嘘のように心が冷める。  
なんで隣にいんのがあいつじゃないんだって。

「歴代の女に聞かせてやりてえな」

俺の言葉に初めて本気を感じたらしく、敦は呆然とそんな事を呟く。

（　　）　　なんとも言えってんだっ

敦のターゲットから免れるように視線を窓の外に向ける。  
キラキラと瞬くネオンがクリスマススを主張している。

俺だってこんな俺おかしいと思うし、らしくないと思う。

かといって気持ち偽って遊べるほど器用じゃねえんだよな。  
前はんなこと考えなかった。  
だから遊べたのかもしれない。

（ アイツ…予定あんのかなあ〜 ）

彼女の笑顔を思い浮かべると、温かさと言えない痛みが胸を走る。

俺…いつまで我慢出来るんだろ…。

警戒することもなく見上げるその唇を奪ってしまいたい衝動に駆られるのも、細い腰を抱きしめたいという誘惑に負けそうになったのも、一度や二度じゃなくもう数え切れないほど。

隙あらば…って感じだよな、俺。

再度深く深く溜息を吐く。

「誘ったのか？その子の事」

「は？いや、全然」

「彼氏いる子なん？」

「いや」

「なんで誘わないん？」

「断られたら…生きてらんね…」

だつてそうだろ？

考えても見ろよ。

断れるだけならともかく、男と過ごすことになったとか聞かされてみるっ！！

うう… そんな事考えたくもねえ。

「…………お前そんなに純だったのか…」

そう呟いた健司の横では、敦が呆れたみたいな顔でポカんと口を開ける。

お前ら俺のことなんだと思ってるんだ？

「確かに断られたらとは思っけど…動かなきゃ進展ないぞ？」

「……そーなんだよなあ」

今のままだといつか襲いそうだし…。

「…なんとか機会みて誘ってみるわ、健司サンキュ」

このまま動かないのもバカみたいだしなあ。

しっかしどう誘おう。

たまたま偶然会ったりとかってハプニングはないんだろうか…。

そんな事を考えていると次が降りる駅だとアナウンスが流れる。

扉が開く方の窓をぼんやりと眺め、窓から見える景色が駅に入った事を知らせ。

（ え???? ）

視線が有り得ないものを捕らえて瞬きを行うと、無情にもまるで夢でも見ていたかのように通り過ぎる。

慌てて窓に張り付くが、この電車に乗ろうとしている人でこった返してよく見えない。

（ 気のせい…か? ）

あいつの事はかり考えてるからそう見えただけ…だよな？

あいつは何度誘ってもこの駅で降りた事ないし。

そう思ってるはずなのに…俺の足は勝手に先程の場所へと向かう。

違うと思っけていても 期待する気持ち疼き、ジツとしてらんない。  
段々とホームに残っている人が消えていく。  
そして。

( いた… )

駅に設置してある鏡の前に、間違えるはずもない彼女の姿があった。鏡を見ながらどうやらはしゃいでるようで、多分知らない女だったから気味悪いと思うのに。

( 可愛… )

俺の頭にはそれしか浮かばなくて。  
でも今は、彼女に自分の存在に気付いて欲しくて。

「<sup>アケミ</sup>朱美？」

名前を呼ぶ。

切ないぐらいに心揺さ振られる名を。

「よ…よ、ようちゃん？」

彼女はやっぱり俺の存在に気付いてなかったみたいで、  
も昔と変わらず俺を呼ぶ。

まあ愛称じゃなくて名前で呼んで欲しいんだけど…。

「何してんだ？」

( 会いたくて とか類染めて答えてくれないかなあ )

なんて 流石に欲求不満なのか俺の頭はそんな事を考える。

「よ、ようちゃんこそ、何してんの？」

勿論そんな答えがあるわけもなく って何かあるのか？

視線が泳いでる。

「いや、俺の家この駅だし」

「あつ、あゝ…そ、そうだよねっ、お帰りなさい…」

あ、ヤバイ。

その顔でお帰りなさいとかっ…！

ううゝ抑えろ、抑えろ俺の理性っ！

ここは駅だっ！

公共の場所だっ！

しかも確実にこいつに他意はないっ！

と、俺の理性は寸前まで耐えたものの 衝動には勝てなかつたらしい。

「朱<sup>アケ</sup>？」

覗き込んで視線が合ったと思った瞬間反らされる。

しかも 真っ赤な顔。

（ 頼むからこれ以上煽らないでくれよ… ）

「なんか用事でもあった？」

「…え、えっど」

なんとか平静を装ったのに、言い淀む姿に理性がフラフラ。しっかりしろよ、俺！  
今までクールで通ってたじゃないかっ！

今じゃ見る影もないけど、って自分で言うぐらい重症なんだな…俺…。

( 頼むから俺の理性試さないでくれよ… )

そんな俺の心境を知らず、ってか多分想像すらしてないだろう彼女はことごとく埋められた地雷を踏んで行く。

「 つ、つい降りちゃった 」

誰か俺を殴ってくれ。

『意味もなく降りる』『俺に会いたかった』とか勝手に変換する  
どうしようもない煩惱を誰か諫めてくれ。  
うっ…抱きしめたい…。

「別にただのベッドタウンだぜ？」

「あーそーなんだ？」

なんとかかなけなしの理性を総動員して返した言葉に対する解答が棒読み、って事は他になんかあったのか？  
っていやいや、自分のいいように解釈するのはやめよう。  
あーでも誘うぐらいいいいな？  
駅には降りてるわけだし。

「折角だから寄ってく？ウチ」

見えないかもだけどこれでも心臓バクバクで、死にそうぐらい緊

張してる。

俺ってこんなに小心者だったかと思うぐらいなのに。

「ようちゃんいつもそればかり(笑)」

毎度同じセリフであしらわれる俺って。

(……せつね…)

「ま、気が向いたら来いよなあー」

しかしそんな顔見せずにそう言う。

朱美の頭にポンと手に乗せて肌触りのいい髪の毛の触感を楽しむ。

って、あゝなんか変態チックじゃね…、俺…。

「気が向いたらねっ」

っていつ気が向くんだよチクショー！

こんな風に少しいいから触れたいとか思うのはお前だけなのに…。触れられたいと思うのはお前だけなのに…。

お前が誰かの隣にいるのも、友達と話しているのだって邪魔したいくらい、お前を独占してたいのに…。

あゝ独占欲強いとウザがられるって言うよなあゝ。

あは、…ダメじゃん、俺…。

でも クリスマス…独占出来ないかなあ。

一緒にいたい ただその思いだけ…。

「週末なんだけど クリスマスって暇？」

って俺の持てる勇気の全てを出し切って切り出したわけだが 無

反応…。

チラッと朱美を見ると赤くなったり青くなったり。

( 聞いてないのかよ… )

せつかくの勇氣も無駄に使い切ったみたい…。  
まあ朱美らしいっちゃらしい気がするけど…。

「おーい、朱聞いてる？」

「 ……へ？…何？」

覗き込むような体勢になっていたから、顔を上げた彼女の顔が触れられそうなくらい近い。

途端に赤く染まった顔に 見惚れてしまう。

化粧っけのない肌に触れたい。

そう思う反面、俺が触れてはいけないものだとも思う。  
手を伸ばしたくても伸ばせない。

何より 相手に好きな奴がいるらしいのに手を出すほど人間腐っ  
てはなくて 。

( こんな風に真っ赤になる相手がいるんだろうなあ )

それが俺であるならこれ以上に嬉しい事はないのに 。

どんな奴なんだろう？

俺とは正反対の奴だったら 諦めつくんな。

いったいどうしたら気持ちをごちらに向けられるんだろう。

「朱？どうかした？」

「うっん、なんでもないのでっ！なんかボーっとしちゃって　何て言ったの？」

気持ちは言えない。

だから　ついからかってしまう。

見惚れたなんて知られたくないし、他の誰でもなく俺の隣にいてくれる間は　、今を壊したくない。

例え俺を見ていなくても　。

「ならいいけど　朱さあ、クリスマスって暇？」

「ふえ？なんで？」

「なんでって…俺も今年一人だからどっか行かないかなって」

理由を聞かれるなんて思わなかったけど　不自然じゃないよな？  
答えを待つ時間が限りなく長く感じる。

いつこうに何も言わない時間が長くなれば長くなるほど、不安に駆られる。

不安に押し潰されそうになる　。  
自分で撒いた種だが　逃げ出したい。

「あゝ予定あるんなら別に……」

「い、行く行く！！」

背中を向けた途端服の裾を掴まれ振り返ると、赤く染められた頬が目に入る。

「そか、んじゃ9時に駅まで迎えに行くからな？ちゃんと来いよ？」

「はい」

返事を聞いてすぐに顔を反らす。

(や…ばっ、ニヤけた顔が戻らないっ！)

平静を保とうかと試みるが、まるで顔の筋肉がなくなってしまったかのように緩みきってしまった頬は戻る気配を見せない。それとは別に次々に浮かぶクリスマスのデートプラン。

(っ！これデートだよな、デート！！)

平静を保とうとする反面、ニヤけ顔を助長させる自分を止められそうにない。

まるで初めてデートするのかってぐらいはやる気持ちは止まらなくて。

あ、朱美とは正真正銘初デートだからしょうがない…か。

(でも…こんなん初めてだよなあ)

今までこんなにもデート一つで一喜一憂したのは始めてかも知れない。

あー、でもこうやってデートプラン組めるのは今まで遊んでたからだよなあ。

ん〜、何処連れてこ?

せっかくのクリスマスだろ???

やっぱムードのイイとこ行きたいよなあ。

ん〜、あの辺りにすっか…。

でもそうすると…。

「あ、朱ちよつと耳貸せ」

「え?」

別に普通に言ってもいいんだけど…まあ、男のサガ???  
近づきたいじゃん??

好きな奴に。

だから…さ。

内緒話する振りして　いや、実際そうなんだけど　朱の耳に自  
分の口を寄せる。

もちろん目は彼女の首筋に行ってしまうわけで…。

細い首筋に跡を残したくなるのは男のサガなワケで…。

…見るぐらいいいよな???

あせってる感じの朱美が新鮮で、そんな彼女の横顔を真横で見る。

(あゝ、睫結構長いんだなあゝ)

なんてこと思ったり、綺麗な肌に頬ずりしなくなったり…。

…抑えたけどな。

いやゝ、抑えるしかないだろ。

朱美に好きな奴いるのなんとなくわかるわけだし。

つてかあれだよなあゝ。

俺…どう思われてるんだろ?

「せつかくのクリスマスなんだからめかし込んで来いよな」

そういつた時の朱美の顔を見ることもなく、名残惜しげに顔を離す。

あんまりマジマジと首筋見るとマチ理性効かなくなるし…な。

再び顔を見た朱美の顔は予想に反して真っ赤で。

真っ赤になった顔のまま、『わかった』とだけ言い置いて朱美は逃

げるように電車に乗り込んでいく。

なにはともあれ、こうして俺達はクリスマスの約束をした。  
。

クリスマス・イヴまであと3日。

【陽輔編】 2・場所

デート…。

デートかぁ。

…はぁ…どうしよっかなぁ。

「おっはよ」

「あ、おはよ健司」

隣に座った健司にいつものように挨拶はする。

考え込み過ぎてて時間の感覚がなかったらしい。

もう健司が来るような時間なんだ。

「お？振られたんか？」

振られたって…こいつは遠慮というものが無いよな。

歯に衣着せないっていうか…。

無遠慮。

「いや、OKもらったよ」

まあそういうわけじゃないから痛くもかゆくもないけどな。

「へえ〜よかったじゃねえか」

「ん、ああ…」

よかった…、確かによかったはずなんだけど…。

「…その割に元気ねえのはなんでだ？」

「…時間がねえ」

超切実。

もうクリスマスまでマチで時間ないんだぜ！？  
今から…かあ。

「…何悩んでんだ？」

「飯食う場所が…ねえんだよ」

「飯？」

「有名なトコは全部埋まっちゃってる」

せつかくのデートなんだしいいところで飯食いたいじゃんか。  
次いつこんな機会があるのかもわからねえわけだし。

「ああ…そんな事か」

「そんなことだと!？」

確かに取るに足らないことだったのかもしれない…けど、人から言われるとムカつく。

「俺んトコくりゃいいじゃんか」

「は？」

コイツ…日付勘違いでもしてんじゃねえの？

健司の家はここらでは穴場となってるレストラン。

おしゃれな外見と雰囲気など上げればキリがないが、デートには持つてこいといえる。

その中でもかなりデザートが有名で、健司自身もプロ並の腕を振るう。

まあこいつの場合親孝行らしいけど。

そんな店が…クリスマスに空いてるのか？

「いやなのか？」

「いやっ、そんなわけっ…ってマチ空いてんの！？クリスマスだけ？」

「丁度キャンセル入ったんだよ、陽輔なら優先的に入れるけど？」  
「頼む！！」

いや、確かにズルイのはわかってるし多分キャンセル待ちしてる人々もいるとは思っただけど…、この際そんなこと言ってられない。健司の店なんて予約しようと思ったら2ヶ月前だって無理なことがある店だし、何より朱美はあの雰囲気が入りそうだし、すぐさま携帯を取り出した健司は何処かに 多分親父さんに電話し始める。

「ん？ああ、そそ、頼むよ。え？わかったわかった。んじゃ 陽 輔大丈夫だって、クリスマス。取れたぞ」

「マチで！？持つべきものは親友だな！」  
「大げさ」

って健司は一言で捨てるけど…。

「いや、マチ！超感謝する！何かしてほしかったら言えよ」

「ん？お前がそこまでマチになる子見てみたいしな」

「…お前いるつもりなの？」  
「まあな、ってか俺が手伝うの前提でお前の予約受け付けられたからな」

ちよっ、まてよ、健司。

だっってお前…。

「健司彼女…」

「ん？先月別れてるから気にすんな」

「別れたって…なんで…」

「なんだろうなあ？合わないんだよな、なんか」

心底不思議そうにいう健司を見ると、本当にお互い合わなくて別れたんであるう事が伺える。

こないだの彼女ってそうすると…1ヶ月持っていないじゃないか…。

健司はモテるけど…長続きしないんだよなあ。

俺や敦と違って健司はマジメに付き合うんだけどなあ。

「んなことよりお前プレゼントはいいのか？」

その言葉に俺の時間が暫し止まる。

…すっかり忘れてた。

「健司」

「自分で選べ」

うっわー、つれない返事。

まあいつもの事だけどさ。

「プレゼントかあ〜」

何欲しいんだろ？

見たトコあんま格好に気を使ったりとかはないみたいだし。

いつもジーンズだしなあ。

朱美の奴、おしゃねなんてすんのかな。

いつも以上にプレゼントには悩みそうだ…。

「放課後にでも早速行ってくれば？」  
「そうっすかなあ。一回見に行ってみるわ」

彼女以外にプレゼント渡すなんて初めてだよなあ。

何渡しゃいいんだ…？

指輪か？

…あいつしなそうだよなあ。

ふうー、なんか…時間かかりそうだな。

「おっはよー」

「おお、敦。おはよ」

げ。

コイツには絶対知られたくないなあ…。

「二人で何話てんの？」

お、おい健司！！

言うんじゃねえぞ！？

…。つて視線を送っちゃいるもの…目が合いもしねえーよ、健司の奴

「ん？」

気づいたのかなんなのか目をこちらに向ける健司。

お、おい健司言うな！？

言うなよ！？

「さあな。たいした話してねーよ、なあ陽輔」

「あ、ああ」

「そ。ならいいや、今日の講義なんだけど…」

健司の言葉に敦の興味は綺麗さっぱり失せたようで、さっそく今日の講義の話を始め。

それにちよこちよこ相槌を打ちながら、胸中で ひやひやさせやがって と健司を睨むと面白そうに目を細める。

健司の奴、気づいてて気づかないフリしやがったな。

俺の心境も知った上でこっやって健司は俺で遊ぶ。知り合った頃からの事だが…。

(健司を朱美と会わせるの…しくった…かな)

健司にとっては俺をからかういいネタになる…よな。

あの健司の事だ、何もせずに終わる事もないだろうし。

…まあ、だからこそ楽しいから一緒にいるんだけど。

( まあ、しょうがないか )

もう知られたんだからしょうがないよな。

そんなことを考えていた時。

「こらー席つけー、講義始めるぞ」

という声と同時に一限目のつまらない講義が始まったが、そんな授業そっちのけで朱美に渡すプレゼントを何にしようか考えに没頭した。

【陽輔編】 3 ・放課後

そして放課後。

(…わかんねえ…)

俺は迷っていた。

もちろん、朱美へのプレゼントだ。

今までの女と違ってブランド物なんてものに全く執着がない朱美のことだ。

んなもの買っても心から喜ぶことはないだろうし。

せつかくなら気に入って貰いたいしなあ。

服はサイズわからねえし、食べ物ってわけにもいかないしなあ。

指輪あげたいけど…朱美　つけそうにないしなあ。

揚句の果てになくしてるのが目に浮かぶ　って言ってもまあ指輪

もサイズわかんないから無理だけど。

サイズが合わない指輪ほど失礼なものはないし。

(朱美は何欲しいんだろ？何もらったら喜ぶんだ？)

ここ何年もクリスマスプレゼントを選んで来たが、こんなにも悩んだのは初めてだと思う。

それだけ朱美が珍しいのか、俺自身が今までにないぐらい真剣なのか、　多分両者だろうけど。

あーでもない、こーでもないとぼやきながらクリスマス一色の街を

歩き回る。

名案なんて浮かぶ事もなく、ただ無為に時間だけが過ぎていく。

(……)

今俺の顔は多分険しいのだろう。

なんだか行き過ぎる人から避けられてる気がするから。

まあ時間がないことに何時になく焦りを感じてるんだから大目に見て欲しいんだが。

そんな事を思いながら何件目かのジュエリーショップに入る。

この時期に男一人で買いに来ているからか、呼んでもいないのに定員がやってくる。

マチうぜえ。

今まで随分と遊んできたこともあって、ある程度宝石には詳しい。

なんたってそういう女とつるんでた事もあったし。

俺は定員の話なんて適当に流しながら、ガラスケースの中を流し見る。

直感に触れるものがあればその近くの商品を見比べればいい、

それが今までの経験で学んだ事だ。

今までのジュエリーショップも同じように見て来たが、直感に触れるものがなくて素通り。

ここはどうだろうか　そんな事を思いながら光り輝くケースに視線を走らせる。

(　?)

隅に申し訳程度に置かれているようなあるガラスケースの前で立ち止まる。

中を覗き込むとキラキラとした輝きが目に映る。

置いてあるのはあまり見かけないデザインばかり。

リング、イヤリング、ピアス、ネックレス、ブレスなどがあり形もさまざま。

その中で俺の目に留まったのはガラスケースの中央に飾られた一本のネックレス。

デザインは女らしいものではあるが、可愛いというよりは綺麗と比喻するもの。

あまりお洒落らしいお洒落をしなくてもさりげなく付けられるデザイン。

「そちらの商品は全て一点物ですよ」

ケースの前で立ち止まったからであろう、近くにいた店員がここぞとばかり近付いてくる。

けれどウザいのを差し引いても説明は受けときたい。

それがプレゼント候補にしたいと思っっている商品なら尚更だ。

「んじゃこれ、プレゼントで」

くどい程の説明を聞いた後に俺が発した言葉で定員はしてやったりといったような笑みを浮かべる。

話しを要約すると無名な新鋭が作ったものらしい。

だからこそ値段は安め…っても学生が買うにとしては結構値が張っているけど。

まあ俺がつけたトコみたいってだけだから気にならないけど。

数分ほど待たされて出てきたのは可愛くラッピングされた小さな小さなプレゼント。

それを受け取ると

「ありがとうございます」

と感謝の言葉を口にしたらかと思うと、脇目も振らずに颯爽と店内から出ていく。

自分に向けられる好意の視線にはもう慣れっこ。

今まではその中からつまみ食いもしてたけど、今となってはうざいだけ。

変に絡まれるのは避けたいし。

「げ、さぶっ」

温かった店内とは違い、肌を刺すような風が吹き荒れる。

その風はなんだかあの街を思い出させるて懐かしくなる。

「ん？」

郷愁に浸っている時、ポケットに入れていた携帯電話が着信を告げる。

つてもマナーのままだからバイブってるだけだけど。

小さな液晶に同じ幼少期を過ごした幼馴染みの名前が浮かぶ。

「おう匠久しぶり。どった？」

「イブ何時になりそか気になってな」

「へ？なんか約束したっけ？」

朱美のことばかりで他に予定らしい予定も浮かばない。

この間は。

「…はあ。んなこつたるうと思ったよ。今年は暇だっってから頼みがあるっていったら？」

「…言われたかもしんね」

確か先月ぐらいに確か、そんな約束をしたような微かな記憶が…。

「まさか無理になったなんて言わないよな？」

ちっ、言っちゃだめか。

「陽輔？」

「…」

「女出来た？」

「いや、彼女じゃない。朱美だよ」

「朱美？なら連れてこいよ。俺も久々に会いたいし」  
「…」

それって三人で遊ぶって事か？

せっかく二人きりのチャンスなのに？

いやだ。

「陽輔まさか二人つきりにさせるよとか思ってる？」

やべ、顔に出てたか？

って電話でわかるわけないか。

「それにしても遊び人の陽輔が朱美を　　ねえ。わかんないもんだ」

それは当人が1番そう思ってるよ　　とはあえて言わない。

「ま、連れてこいよ。んじゃそれだけだから」

「え？ちよつと待て匠っ！」

呼び止めは役にたたず、ツーツーツと無機質な電気音を繰り返し

ている。

「マチかよ」

俺ははまだ無機質な音を発し続ける携帯を呆然と見つめていた。

クリスマス・イヴまであと2日。

【陽輔編】 3・放課後（後書き）

遅くなってしまいました。なるべく早く更新できるように頑張ります。

【陽輔編】 4・ドライブ（前書き）

毎回毎回遅くなってしまいゴメンナサイ。感想くれたら頑張れるんだけど…とか催促してもいいですか？（お

【陽輔編】 4・ドライブ

二人で出掛ける事なんて吐いて捨てるほどあつたはずなのに、俺はガキみたいに緊張している。

ボタンと音をたてて車のドアを閉めるとハンドルによりかかる。

あの後何度か匠を説得しようと思いたがごとく失敗。

予定通り(？)車で地元に向かうわけなんだが、なんだかしっくりこない。

まあでも今連絡取ってないみたいだから、匠に会うのは多分朱美は喜ぶだろう。

嬉しそうな顔が見ればいいかと思う俺と、独占したいと思う俺。

まあ思つた所で変わる事はないんだけどな。

そう思い直すと車のエンジンをかける。

心地よい振動とともに控えめな稼動音が響く。

エンジンが気に入って買ったこの車は、今の所俺の中で一番高い買い物だ。

青い車体もかなり気に入っている。

俺は車の中をざっと見回す。

たまに男同士で出掛けると変なの置いてくバカがいるから。

(ないみたいだな)

それだけ確認すると今の気分でCDを突っ込み、時計を気にしながら車を発進した。

現在時刻は8時。

ここから朱美の駅までだいたい30分ほどだから、30分前にはつくだろう。

待つてる時間もデートのうちってな。

クリスマスイブ、しかも休日っていう状況にも関わらず、道はいた

つて平常通りで別段予想外に混むなんて事もなく、予定通りに目的地に到着する。  
大きな駅だが、広いのに殆ど誰もいない今の状況では広いからこそ物悲しさを漂わせる。

(つてこんな感じなのも好きだけど)

今から行く俺らの地元も栄えてるとは言い難い。  
でもだからこそたまに帰りたくなる。  
あの街に流れる空気が好きだから。  
そんな事を思いながらハンドルに上体を預ける形で駅のロータリーを見渡していると、待ち人の姿を捕らえる。

( 朱美…だよな？ )

俺が断言出来ないのも当たり前だろう。

確かにめかしこんでこいとは言ったけど、今までジーンズ姿しか見たことのない朱美があんなに可愛いらしい恰好をしてるんだから。  
白いコート、その下に覗く淡い色 多分ワンピースだろう、それに合わせた黒い編み上げのブーツ。

問題はそれを着ているのが朱美だということ。

慣れないヒールになんだか歩きづらそうだが、それがまた支えてやりたいっていう男の保護欲を掻き立てる。

朱美は俺に気付かず駅の階段を上 え？

ブツブツ

咄嗟にクラクションを鳴らすと、予想通りびっくりした朱美が振り向く。

身を乗り出して助手席の窓を開けると冬の冷気が社内に入り込む。

「朱美、こつち」

「ようちゃん!…うっわっ!…!!」

名前を呼ぶと嬉しそうに笑顔を浮かべ、慣れない靴であることを意識していなかったんだろう、体勢を崩す。

「朱っ!?!」

咄嗟に名前を呼ぶ。

何故外に出ていなかったのかと自分の行動を後悔しながら。

「えへへ…ごめん、平気」

なんとか踏みとどまったらしく、恥ずかしそうに顔を向ける朱美を見て、安堵したのと同時に自分がきつく手を握っていたことに気付く。

「ったく、気をつけるよなあー。ま、早く乗れよ」

しっとりとかいている汗を拭い、中から助手席のドアを開けると、ゆっくりと歩いて来た朱美がドアを潜る。

キョロキョロと動く視線は珍しそうに車内を見渡している。

クッションを抱きしめるのは小さい頃と同じだから癖なんだろうなきっと。

キョロキョロしていた視線が戻ってきたかと思うと、今日初めて正面から顔を覗く。

「ようちゃんが車持つてるなんて知らなかったよー」

化粧をしてる事にはすぐ気が付いた。  
普段リップも塗らないのに、今日はナチュラルにこそ見えるが、し  
っかりと化粧をしていた。

普段から長いと思っていた睫毛は今でははつきりと影を作るほど。  
二重になりたいという女が多い中、もとの一重のまま涼しい目元を  
演出していて、それが朱美が本来持つてる空気にマッチしている。  
俺が予想していた以上にめかしこんでくれたらしい。

「…あー、言っでなかつたっけ？」

そんな細部まで視線を走らせながら出た相槌はちょっと心そこにあ  
らずだったけど。

「全然！持つてるって知ってたら行きたいトコ一杯あったのになあ  
」

え？

それ…もしかして俺誘われてるのか？  
まあ朱美に他意はないんだろっけど。

つても今年はまだ厳しいなあ。  
無理矢理空けたからなあ、今日。  
つてすると来年か。

「んじゃ来年でいいか？」

「え？何が？」

「行きたいトコあるんだろ？」

「え？連れてつてくれんの!？」

俺的には連れていかせてもらうんだけどな。

「だって、行きたいんだろ？」

「うん！約束だからね！」

んな嬉しそうに笑うなよー。

まあ運転中だから何も出来ないけど。

「じゃあようちゃんに彼女居なかったら誘おうって」

彼女？

いるとしたら当人だけだと思つとはさすがに言えない。

「おう。約束だからなあ？朱に彼氏居たって行くぞ？」

「あははW来年も彼氏なんていないと思つよ」

俺としてはさらりと探つたつもりんだけど…ふいに淋しそうにしたのはなんだろう？

車はスムーズに進んでく。

もうマニュアル車の運転も慣れたもので、話している間も左手と左足が動く。

ミラー越しに朱美を盗み見る。

「朱？どした？顔になんか付いてる？」

ジッとこっちを見つめてほうけている朱美に声をかける。

目立つことにはもう慣れたとはいえ、片想いの相手に見つめられるのはどうにも居心地が悪い。

「え…と、何処向かってるのかなあ？って」

嘘ついてるな。

「たく、何考えてたんだ？」

絶対今なんかを隠そうとしたよなあ。

まあ必死そうだから聞かないでおくか。

「あゝ、一回地元の方戻ろうかと思って」

「地元？」

驚かそうと思ったけどいつちやうか。

「そ、<sup>タケイ タクミ</sup>岳伊匠つて覚えてる？」

「え？岳ちゃん？」

意外に即答。

まあ仲良かったからなあ。

あーでもあの日から一緒にいることは少ないけど。

そいやそういう話はしてないなあ。

機会がありや聞いてみるかな。

頭の隅で別の事を考えながら朱美を盗み見る。

「そ。引っ越してからあいつとは連絡取ってたんだよ。知らなかっただろ？」

そいやなんで朱には言わなかったんだっけ？

…あー、泣かれるからか。

「…え、だって、岳ちゃん知らないって…」

あーこのままだと匠の印象悪くなっちまうな。

「俺がそう言えって言ったからな。つてか、朱今連絡取ってないだろ？」

「うん、引越す時携帯とかも持ってなかったし」

つてかあの頃そんなもんなかっただろ　確か携帯が普及したの中学に入った後だったし。

とかってツツコミはヤメトコ。  
多分無駄だから。

「こないだ匠の方からメール来てたからさ、朱美のコト話したら会いたいってさ」

「岳ちゃんなんて懐かしい〜!!会う、会う!」

こんなにはしゃぐとは…なんか複雑な心境だ。  
俺ホント独占欲強いかも。

『陽輔クール過ぎて私とは合わないと思う』

初めて告られた相手にはそういわれて別れたのに、…変わりすぎる俺。

そんな軽い自己不信に陥っていたら、また視線を感じる。

「朱?今度は何?」

「…なんでもないよーだっ」

朱美の反応は気になったが、そろそろ気を散らさないで運転しないとな。

通行量増えてるし、事故るのは洒落にもならないし、そろそろ高速だし。

頭の中を整理しながら前を見据えると緑の交通標識が見える。

(500メートル先左折でインターか)

時計をちらりと見ると推定到着時間を割り出す。  
まあだいたい予想通りの時間か。

「どれくらいで地元着くの？」

「ん〜、この調子だと2時間くらいかな」

まるで考えていることを感じ取りでもしたかのような問い掛け。  
まあ朱美に限って有り得ないけど。

朱美らしくないと言えば…。

「朱普段そついう服着るの？」

今朝朱美の姿を見たときから感じる違和感。

惚れた鼻肩目を差し引いたとしても異存無しに可愛いと思う。  
つてやっぱり俺面食いか…？

「へ？えと…ううん、着ないけど…」

「そ？まあ…その方がいいよ」

これを聞いて安堵した俺がいたのは言うまでも無い。

嬉しいけど嬉しくない…そんな心境をわかって貰えるだろうか。  
俺の隣だけでならいいけど、ほかの男の前では…だな。  
多分朱美はそういう自覚ないんだろうし。

「…似合わない？」

ほらな。

ん〜、どう言えば朱美に伝わるだろうか？

「あ〜、いや、そういう意味じゃなくて…似合ってるよ。友達の見立て？」

こつこつ時遊んでた癖にいい台詞が出てこないのはもう性格の問題か？

「あ、うん」

「あんま頻繁にそういう格好するなよ？」

ついつい出る本音。

「なんで？」

…答えられるわけがない。  
だから。

「…動き難いだろ？」

つてことにしといた。

まあいつもパンツルックだからあながち間違っちゃいないだろう。

「もっと違う格好の方がよかった？」

あ〜、こりゃ完全に誤解してる。

遠回りに似あわないとでも言われてるみたいに思ってるんじゃないか？

かといつて気持ち可言えるわけもなく…。

「あ、いや…今日は車だし…、動き難いとかないだろう？」  
「ん、まあ…」

何かを考えるような仕草に少し焦る。

まあ多分朱美が俺の気持ちを理解することは万に一つもなさそうだけど。

「あんま深く考えなくていいから」  
「…うん」

別に悩ませたかったわけでもないし。

あ、そういや。

「朱、車酔いとかしない？」

「ん、多分…かな？あんまり車って乗ったことないから」  
「え？今まで彼氏とかと出かけたとかしなかったのか？」

聞いてから後悔した。

『いた』と過去形で言われたとしても…それでもやっぱりいい気分にはならないだろうし。

はあ、俺ってバカかも。

「出かけた…ってか、彼氏って居たことないもの」

「…え」

嘘…って感じじゃないよな？

ってことは…まだ…？

って、変態か俺は。

「ようちゃんには彼女一杯居たんでしょ？」

グサッ。

って形容詞が一番しっくりくるかもしれない。

口調が既に疑問系じゃないくて確認って感じだから…、どっかから話聞いたのか？

大学同士でコンパとかしてたしなあ〜。

その中に共通の奴がいたのかも…、マチついてねえ。

「…おう」

否定なんて出来るわけがない。

「モテるんだね」

「…さあ」

モテたとは思うけど…女が惹かれた自分って結局容姿なんじゃないかと思う。

あ〜大学とかも入るか。

結構な学歴になるし。

朱美が惚れてる奴ってのもやっぱりそういう奴なのかなあ。

女ってそういう男の方が好きなのか？

「朱…好きな奴居るだろ？」

気付いたら出ていた言葉。

多分一番知りたかったこと。

そして、一番知りたくなかったこと。

「…っ！？」

「…凶星かあ」

嘘がつけないってか、反応が正直だよなあ。

周りに居た女と違って打算的なもんがないっていうか。

しっかし…自分で聞いたこととは言えかなりショックだ。

明日健司と呑み行くかな…。

「どんな奴？」

「え…と…」

俺と正反対だといいな。

そしたら…きつと諦めがつく。

「バカで、優しくて…しっかりした人 かな？」

「そか」

…微妙。

どんな奴だか全くわかんね。

まあでも朱美が惚れるんだからいい奴なんだろうなあ。

「…クリスマスなのに俺でいいのか？」

ホントはそいつと居たかったんだろうなあ。

俺は今朱美と居れてるけど…、朱美は…。

「え？なんで？」

「本当はそいつと居たかったんじゃないの？」

肯定されても否定されても嬉しいとは思えないけど。

聞いてしまっ。

そして。

「…誘えなかつたんだもの」

皆考えることは同じって事か。

せつね。

「ようちゃんこそ…。いいの？クリスマスに隣に居るのが私で」  
「いいんじゃない？気兼ねしなくていいし」

ここまで言われて気持ち言えるほど、絶対的な自信は俺にはねえよ。

「そっか」

その一言の後、社内の雰囲気は何故かとても険悪なものになった。  
せつかくクリスマスに好きな女と一緒にいるっていうのに…何やってんだろ俺。

車はスイスイと景気よく走っているのに…。  
見かける店見かける店クリスマスの飾りをこれでもかっていうぐら  
いしているのに…。

その後無言のまま、目的地までの距離は縮まっていった。

【陽輔編】 5 パーキングエリア（前書き）

コメントありがとうございます。頑張っちゃいました

【陽輔編】 5 パーキングエリア

しゃがみ込む背中をさすってくれる…

あれからどれくらい経っただろう。

静寂を破ったのは急になり始めた聞きなれた音楽。

「ようちゃん？」

俺であることを確認するように見上げる 身長差もあって座高は俺のが高いから。

この曲ならメールではなく着信だろう。

今日電話をしてくる奴の心辺りがない。

結構長い着信なので急用かもしれないし…。

「ああ、俺の。悪いけど誰からだか見て？」

「え？何処にあるの？」

「シフトレバーの後ろに小物入れあるじゃん？そこ」

「…シフトレバーって？」

返って来た返答にキョトンとしたあと、聞き返された言葉の意味を理解する。

そいや乗らないっていったんだからわからなくても当然。

「あゝ、俺が左手で弄ってる奴」

流石にわかったようで小物入れから俺の携帯が取り出される。着信音は既になく、切れてしまったようだ。

「誰からだつた？」

「え…つと…」

流石の朱美でも携帯は使えるんだなと結構酷いことを思う。  
使い方聞かれるかと思つたから。

「誰？」

「えつと、匠…さん？」

匠かあ。

催促の電話か？

それにしても…。

「なんでさん付けなんだよ。岳の事だぞ？」

「岳ちゃんなの？」

そっか、もともとガキの頃は俺も名前なんて呼んでなかつたんだし  
知らなくてもしょうがないか。

「そ。あー、朱折り返して電話かけてくんね？」

やっぱりこなくてもいいとかって電話なら儲けもんだし。

「え〜！？私が!？」

「んなこと言つたつて俺運転してるし…。事故つて欲しい？」

つてか携帯持った時点で交通規制にひつかかつてアウトだな。  
イヤフォンマイクなんか備えてないし。

「か、かける。かけるから！」

何を感じ取ったのかかなり慌てて宥めるようにジェスチャーがつく。

別になんもしないけど…何焦ってたんだ？

朱美はそのまま意を決して電話をかけたようで、俺の携帯を耳に当てている。

静かな車内では俺にもコール音が聞こえる。

朱美が息を飲んだのと声が聞こえたのは多分同時だっただろう。

『お前なくかけてるんだから出るよなく、ってもしかして今運転中か？』

男の俺から見ても、匠はいい声してると思う。

緊張してんのかあがつてんのか、朱美から視線を向けられるが知らないふり。

朱美と違って嘘はバレない方だから多分大丈夫だろう。

「おーい陽輔ヨウスケ？？」

何も返答がないことに匠もやっとな違和感を感じたらしい。

まあ普通携帯は本人が出るよな、うん。

「え、あ、はい。ようちゃん運転中で…あの…」

なんで敬語なんだ？

思った以上に緊張してるらしい。

それに比べて…。

「あ、朱美？マヂ陽輔と一緒にいるんだなw」

「え、あ、はい」

驚きもしない匠。

まあ散々今日は一緒だと言ってたんだから当たり前か。

「おーい、なんで敬語なんだよー、俺達の仲だろ〜?」

俺達の仲って　どんな仲だよ。

思った以上に漏れる声に内心毒づく。

…俺心狭つ。

きつと2ch的に言うなら【onnz】な感じだな…ってヲタじゃないぞ、俺は。

「や、なんか…ビックリしてて…」

「会ったらもつとびっくりするぜ?マジいい男だから」

よく言うよ。

まあ確かにカツコイイと思うけど…ってかなりカツコイイか？

いやいや…まてまて…。

脳裏に一緒に遊んだ時のことが浮かぶ。

いつもよりも逆ナン多かつたつけ。

いやいや、女に好かれりゃいいってわけじゃねーし…とか思いつつ  
チラリと朱美の反応を伺う俺って　全然クールじゃねえし…。

「　ぷっ…大人っぽくなくても岳ちゃんは岳ちゃんだね」

「ど〜ゆ〜意味だよそりゃ」

「そのまんまの意味ですよ〜だ」

緊張がなくなったのはいいとしても、あんまり仲よさ気に話されるものなんか気分悪　って俺大人げないし…なんか新たな自分発見はいいけど格好悪すぎだな俺。

「朱く？匠の用事何？」

ちやつかり茶々いれるとことか。

多分俺の気持ちなんて気付く事すらないだろうけど、当初の目的を思い出すことには成功したようだ。

「あゝ岳ちゃん、ようちゃんが何の用だ？って。 ……ちょっと待って。ねえ、ようちゃん何時に着きそ？」

やっぱり到着時刻か。

「んゝ11時半には着くって言つといて」

「あー、岳ちゃん？11時半には着くって。 ……あゝい。 岳

ちゃんがわかつたつてさ」

「そっか、わかつた」

電話を切ると朱美は携帯をもとの小物入れに戻す。

電話で話していた声がなくなりまた無言の時間になりつつあるが、先程のようにはなりたくなくて必死に話題を捜すが、思い付かない。

半ば諦めかけた頃。

「ようちゃんさっきの着たAquaTimezでしょ？」

と朱美が助け舟を出す。

「ん？あゝ好きだからな」

真っ直ぐな歌詞が結構ツボ。

まあ中には稚拙だつて嫌う人もいるみたいだけど、俺はああいう風に真つすくな言葉が出せる事すげーって思う。言葉を飾り立てる方が多い時代だからだろうな。

「小○な掌 だつたよね？」

「知ってたんだ？」

「詳しいってわけじゃないんだけどね、私も今着つたそれだから…」

「へえ〜偶然、同じ曲かあ〜」

やべ。

超顔にやける。

意識して反対車線を見ているようにして顔を反らす。

そして思い出す。

着信音が鳴つた時。

「だからか。初めに自分の携帯確認したの」

「そ」

「他に何の曲知ってる??」

「ん〜有名なのしか知らないよ。決意〇朝に だとか、等身大のラ〇ソング だとかかなあ。ようちゃんのオススメは?」

「星の見えな 夜 とか、ALNES とかいいと思つたな」

どちらもAquaTimezの中でも好きな曲。

「へえ〜今度聞いてみよつと」

え?

持つてない??

それなら…。

「貸そうか？アルバム」  
「え、ホント？貸して」

よし、これでまた2人で会う約束取り付けやすくなった。  
匠にちよつと感謝かな。

あいつから電話なきゃこんな話しなかっただろうし…って、パーキングっ！

高速からパーキングへのわき道へと入る。  
喉渇いたしな。

朱美は曲がったことに気付いてなさそつて、なんか幸せそうだけど…何考えてるんだ？

朱美が気付く前に駐車も完了。

「朱なんか飲む？」

「んゝ一緒に買いに行く」

何処だかもわかってないくせに返事をするトコは変わってないんだなあ。

「パーキングエリア。修学旅行とかでバス止まっただろ？」

「パーキングエリアってこんな感じになってるんだあゝ」

はしゃいでるって言うよな？これ。

走り回ってるってわけじゃないけど…走り回りたいって感じ。

…降りたことないのか？パーキング。

いや…少なくとも小学校で6回、中学で3回の9回はあるんだからそんなこと…ないよな？

広いって喜ばれてもなあ。

「ここなんて狭い方だぞ？中には小さい遊園地ついてるトコもあつ

たし」

「え〜！遊園地！？」

え？そこ驚く？

結構有名だと思っただけどなあ。

「今度行ってみる？」

「行くっ！行ってみたいっ！」

なんていうか…目がキラキラ？？

…やっべ…、超可愛い…。

下から見上げるなよ。

とは思うもののそんな事いうのはなんかイヤだから…。

「朱美…ガキっぽ…」

まあホントにそう思ってもいるし…な。

まあ逆に反応が可愛いつて意味だけど。

「わ、私の方がようちゃんより早く生まれてるんだからねっ」

「精神年齢の事だから」

「むうー」

確かに俺のが3ヶ月遅く生まれてるけど…それだけだろ？

今年でこんな反応する奴いないって。

ってかコイツ普段男っぽいぐらいなのに、たまーにこんな反応するんだよなあ。

そういう所にドキッとするんだけど。

とかって思ってるうちに自販機の前。

まずは自分用にホットコーヒーを買う。

「ほら、何飲む？」

「ん〜午後ティー」

午後ティーつと。

ガコンという音がして出てきた午後ティーを朱美に渡す。

「え」

「ん？アイスだろ？違った？」

「え、あ…うん、ありがと。よくわかったね？私アイス飲みたいなんて言わなかったのに」

あー、そいや俺はホット買ってるのにアイス買ってるってのはちょっと変かもな。  
でも。

「昔から飲み物でホット飲まないじゃん、朱は」

母さんが持つてくるココアだって温かいうちは口もつけなかったもんなあ。

「覚えてると思わなかった」

「ばーか。忘れてねーよ」

つていうかもう癖だな。

こいつにホットってイメージないんだよなあ。

すでに選択肢になかったぐらいだし。

「ほら、朱？何ほつけてるんだ？ほら車戻るぞ？」

「あ、うん」

キョトンって感じだな。  
絶対になんかボケーっとしてたんだと思うんだけど。  
そんなのほっといいてさっさと車に戻る。  
寒いしな。  
すると後ろからなんか勢いのある靴音がして…。

ガツン。

後ろから何か いや、朱美に体当たりされたことによりバランスを崩す。  
んでそのまま走り去る朱美。

…逃がすわけねえ。

全速力を持ってして追いかける。  
男の脚力に女が叶うわけもなく…ってか俺これでも一応ジム行ってるし、結構すぐに追いつく。

「あ〜け〜みっ!〜!」

ドサクサ紛れに抱きついて羽交い絞めにする。  
コイツ昔っからわかりやすい反応するよなあ。  
今度はなんだってんだ。

「く、苦しいってばっ」

そりゃ後ろから羽交い締めしてんだもん、そつだろつな。  
追いつかれることなんて考えりゃわかることだろうに。

「朱美くほら謝れ。危うくこけるとこだったるお〜？」

マチでギリギリだったんだぞ？

さすがに好きな女の前でなんてコケたくないだろ？

それをするとこだったんだぞ？

わかってんのか？

「こければ楽しかったのにい〜」

「あん？」

ボソツといわれた言葉が頭をループする。

クククツと自分でもちよつと怖い忍び笑いをしながら首を締め上げる腕に力を込める。

その後数十分、それを維持したのは言うまでもない。

まあ…役得？

こういう時じゃないと抱きしめるとか無理だからなあ。

ま、しゃーないだろ？

俺だって男だし…な。

【陽輔編】 6・俺の地元

「遅い！」

顔を見てすぐ怒鳴られた。

怒っているのはモ子匠。

なんでかって？

そりゃ普通怒るよなあ、約束ってか一度伝えた時間よりも30分以上遅れりゃ。

まあでも。

「いーじゃねーか、混んでたんだから」

半分ホントで半分嘘。

確かにこっちにくる途中の道から込み始めたけど、遅れた一番の理由はパーキングでイチャついてたからだからなあ。

まあもちろんそんなことご丁寧に説明する気は全くないので、朱美にも緘口令を強いている。

まあ…あまり期待はしてないんだけど。  
理由は…。

「…目が泳いでるぞ、朱美」

こりゃ完璧バレてるな。

朱美はガキの頃から嘘つけない。  
必ず目が泳いだり言い淀んだり。

「…え、な、なんの…」

「お前相変わらず嘘下手だなあ」

もちろんその事を匠は知ってるから、多分無理だろうとは思ってたけど…ここまで改善されてないとは思わなかった。  
ある意味すげえ。

しかも本人に自覚はないらしく、ホントに不思議そーな顔するし。  
まあ匠の方も朱美なので嘘がバレバレなのわかっててももう何も言わない。

ま、これ狙ってたんだけど。

「しっかしお前クリスマスに呼び出すとはいい度胸だよなあ」

朱美で遊ぶのも楽しいっちゃ楽しいんだけど、こっちだって予定がある。

用事はさっさと済まさないとな。

「ふっ、それで来るお前もなw」

っってお前が譲ってくれなかったんじゃねーか。  
よく言うつよなあ。

「…んで？なんだ？頼みたい事って」

「プレゼント買うの付き合えよ」

「はっ！？おまつ それだけの為に呼び出したわけ！？」

「だっってお前今年暇だっって言ってたじゃんか」

確かに言った…言ったけどよお（泣

あゝ、めっちゃ楽しそうな顔しやがってっ！

朱美の前だと何も言えないの知ってるのいいことに…やってくれる  
じゃねえーか。

くっそお。

毎回毎回コイツと絡むと苛立つ　　が、俺たち見て笑ってる朱美見るとなんだか苛立ちが消える。昔からコイツが俺たちの潤滑油になってんだよなあ…本人に自覚は無いようだけど。

（大人になるんだ、俺！用事さえ済めば朱美と二人つきりだっ！）と、俺はなんとか自分を落ち着かせる。

「んで？どんな奴なん？」

プレゼント買うつて事は相手がいるわけだろ？んでわざわざ俺呼び出すつてこたあ…女絡みだよな？

匠の彼女つてことか。

「ん。あの子だよ」

「は？あの子つて言つてもわかるわけ…」

俺の脳裏にある少女が浮かんだ。

俯きながらブランコを漕ぐ少女の姿が。

「　　つてもしかしてガキの頃の？」

まさかとは思つた。

それは俺が引つ越す前の話。けれど、嬉しそうな匠の顔からそのままかであることを悟る。

「だつてお前名前しか知らなかったじゃねえか」

そう、コイツが引つ越した時期にやっと名前を聞いたんだと少し寂

しそくに話してた記憶がある。  
連絡先を聞くこともしなかったって言って暫く匠は荒れていた。

(それなのに…再会したっていうのか?)

俺の疑問は次の匠の言葉で簡単に肯定された。

「まあホント偶然。お前らと一緒にだよ」

偶然…って言っていていいレベルじゃないだろ、それ。

ん?

再会したって事は会ってるんだよな?

うん?

確か匠都内に一人暮らし始めたって言ってなかったか…?

「ってか待てよ?なんでわざわざこっち呼び寄せた?お前だって都

内暮らしだろーが」

「まあそれはちよつと…ね」

「なんだよ」

「しらねーの?最近この辺りよく紹介されてるじゃん」

この辺り?

つて…地元こゝろのことだよな?

なんかあったか?

「なあ朱美?」

朱美の方を見ると特に驚いている様子がなくて、それを見た匠が朱美に同意を求めた。

「え、あ、うん。あんまり詳しく見てないから詳しくはないけど、そんな特集してたね」

…マチですか。

朱美でも知ってるとか…俺情報遅い??

…うわあ〜マチシヨックだ…。

しかしそんなん知られたくはないので平静を装う。

「ふーん。で?何買うんだ?プレゼント」

「あ〜それは…」

匠が朱美を見る。

…つて朱美??

「陽輔は買ったのか?」

「!?!」

お、おまつ!

本人前にして何いつてん!?

「お、俺の事は…どうでもいいだろ」

こんなトコで答えられるわけがねえ。

そんな様子を見ながら匠は俺と朱美の関係を悟ったらしい。

「へえ。ま、お前でも苦労することあるんだな」

心底珍しいものを見たような顔をする。

「…なんとも言え」

俺だって惹かれてるって気付いてからここまで何もしないなんて自分で驚いてるとこなんだから。

(大体朱美が鈍感過ぎ…)

チラッと朱美を見ながら他力本願的なことを思う。

まあ実際鈍感だと思ってるからいいっちゃいいんだけど…。  
んでもって。

「 ようちゃん、岳ちゃん。懐かしいしちょっと向こう行ってくんね」

そんな俺の気持ちを知るはずもない朱美は一言いい置いて背中を向ける。

まあ多分久々だし行きたいトコでもあるんだろう。

俺は俺で朱美に聞かれたくない話もあるわけだし、匠もそれには同感らしい。

二人して同じ言葉を投げかける。

『迷子になるなよー』

言ったことがダブったことに関して匠と二人顔を見合わせて笑いあう。

こんな短時間でも匠は朱美が変わってない事に気付いたようだ。  
ま、よく二人で探し回ったしな。

「 ぷっ、ってか朱美変わらな過ぎだろ」

朱美の背中が遠ざかり、もう声が届くことはないだろうって距離で

耐えられないといった感じで匠が笑い出す。  
そのこと事態は賛成だが…何故だろう。  
人から言われるのって腹立つんだよな。  
ま、俺もそう思っっちゃいるわけなんだけど。

「それより陽輔、朱美に何も言ってるの？」

「…ああ」

「へえ〜」

まるで希少動物でも見つけたような顔　　ってなんなんだよその珍  
しいって言いたそうな視線は。

「あの陽輔がねえ」

「うっせ。あいつ前にするとそういう言葉でて来ねえんだよ」

「…うっわ、いいやがった」

「どつとでも言えよ」

俺だって今の俺がおかしい自覚はある。  
かといって…しよーがないだろ？

「陽輔もしかして初恋？」

「あ？お前知ってるだろ？俺が今まで何人と関係持ってきたかなん  
て…」

「ああ知ってるぜ。女の方から告って来たって奴ばっかな」

俺の言葉を遮って自信満々にそっぴいきる匠の目は言い逃れの出来  
ない目。

昔から抜け目ないんだよな、こいつ。

…よく覚えてやがるよ。

「ま、これ以上は突っ込まないでやるよ。で？陽輔何買ったんだ？」  
「…それ聞いてどうすんだ？」

「参考にしようかと」

「止せ。女つっても皆違うんだぜ？朱美にはいいけどお前の彼女に合うかなんてわからん」

「…そういうこというお前見るとホント遊んでたのバレバレなんだけどな」

「…いまさらそんなことあどうでもいい。

どうせ朱美だつて知ってることだし。」

「お前があげたいと思ったものでいいんじゃない？俺どのみち小学校の時の姿しかしらねーし」

「ん〜そうなるかあ。ま、んじゃ悩むの付き合えよ」

「悩むのは匠だ」

「ま、そりゃそうだけど…な？」

「わかったわかった。こっちも予定あるんだからさっさと行こうぜ」

「ま、そだな。朱美どうする？」

「ん〜、あっちの方向って言ったら昔のあいつの家かあ、迎えに行くか」

「そだな」

結構頻繁に行き来していたのでしっかりと覚えている。

よく迷子になった朱美探して駆けずり回ったっけ。

懐かしいよなあ、ここも。

匠の彼女の話ボチボチ聞きつつ歩いていると、思ったとおりの場所に朱美を見つける。

しかし。。

(泣いてる?)

その背中が泣いているかのようにどこか切ない。

「朱美？」

一向に気付く気配の朱美に呼びかけるのでさえ躊躇われるほどに。抱きしめてやりたいと思ってやるほどに。

「あ…、行く？」

明るく返事をする朱美だが、俺も匠もガキの頃から知っている中。何か思い悩んだであろうことは簡単に想像できる。そして朱美が見ていた家の方角に目を向けると…。

「…あ、…家、取り壊されちゃったんだなあ」

何も無い空き地。

そこにはホントに何も無くて…朱美の家があった面影も探せない。

「ん、そうみたい」

朱美は気付いているんだろうか？

自分の目がとても切ない事を…。

俺には…掛けた言葉が見当たらない。

俺は…どうしようもなくなって家を手放しているから。

そうしなきゃいけなかった事なんてあの時点でさえわかったから。

ああ、そうか。

「ま、家がなくなっても朱美が忘れない限りはここは俺達の地元だろ？」

俺の地元は土地じゃない。

朱美や匠がいる所が、俺にとっても地元なんだ。

「…っん」

気のきいた事ではなかったと思うけど…、朱美の晴れ晴れとした顔はつい見惚れてしまうほど。

朱美にだけはそういうクサイこと言えないんだけど。

「んで？何処行くの？」

「ああ、シヨツピングモール行くつもり。二駅先らしいしな」

止めっ放しな車がちょっと心配になるけど…ま、この辺りなら平気か。

ちらりと振り返った朱美の言葉は俺の耳にも届いたけど、俺は気付かないふりをした。

朱美の気持ちは朱美のもの。

背中を押すことは出来ても深入りはしない。

ガキの頃からそれが俺らのスタイルだったから、それは変わらない。それが俺らの『居心地のいい場所』だから。

【陽輔編】 6・俺の地元（後書き）

遅くなつてしまいました。

ホントに申し訳ございませんっ！

「前回の更新いつだよ!?」って話ですよ。ホントゴメンナサイ！

言い訳していいかな!?

言いかな!?!?!?

ここずっと転職活動と引越しの準備してました。私が今東京なんだけど、好きな人追いたくて福岡に転職決めて、家決めて…って。まあそうしたら昨日相手に彼女出来たこと判明したんだけどね（

…!!

ノンフィクションでこの経験も見分には楽しそうなのでそのうち小説にしまーす。

引越しが3月末なのでまだまだ遅くなるかもです…。

待っていていただけると…すごく嬉しいです。

失恋の痛手ってひどいもんだね…。

ではまた…。

【陽輔編】 7. プレゼント

朱美となんとか別行動を取ることにして別れた後、俺と匠はシヨッ  
ピングモール内を適当に歩いていた

「んで？もちろんどんなん買つかぐらいは決めてるんだよな？」

俺は適当…って感じだったけど、匠はどっかを目指しているような  
感じだったから、そんなことを聞いてみる。

「…まあ…一応…」

「何買うんだよ？」

まあもともとから匠が決めたもんにはケチつける気なんて毛頭ない。  
だって相手の趣味も好みもわからないどころか、話したことすらな  
いんだぜ？

いくら女と遊んでた過去を持つてる俺にしたって、選べるわけがね  
え。

まあ多分匠はそんな風に考えちゃいないだろうけど。

付き合っただけは浅そうだし…小物系かな？とかって思ってたなら。

「…指輪…かなあ…？」

え。

指輪って…おい…。

「匠何気に独占欲強いのかな」

「…なんでそうなるんだよ…」

「いや、知らないんじゃないわ…」

匠が指輪…ねえ。  
相当入れ込んでるんだなあ…。  
くっそお、俺だって朱美に指輪買ったけど…付き合っても  
ないのに指輪はあげられねえよな…。

「んで？どんなの？つてかサイズわかってんのか？」

「9号。可愛い感じの奴なんだけど…」

「へえ。一応目星は付いてる訳ね」

「この店」

匠が足を止めたのは全て一点物で有名なジュエリーショップ。  
値段もそこそこ安くして学生とかにも人気がある店だ。  
実際俺も何回か買ったし。

「いらつしゃいませ」

小奇麗にしたおねーさんがにこやかな笑顔を向けてくる。  
…匠も俺もスルーだったけど。  
チラッとおねーさんを見返してみると額に青筋が浮いている。  
綺麗って言える顔もあぁなると台無しだな…うん。

「陽輔、コレ」

匠に連れられて指を指されたショーウィンドウの中。  
所狭し…とは言わないまでも、たくさんの宝石が立ち並ぶ中、匠が  
指を刺したRING。

「へえ…」

素直に感嘆の声を上げる。

女というよりは女の子らしいデザインのそれは、もしも朱美が嵌めるのだとすると少々甘過ぎる。

匠の彼女はきつと可愛い感じのタイプなんだと認識する。

「ど？」

「いいんじゃない？彼女に似合いそうなんだろ？」

「ああ」

つたく、意外に純朴なんだなあ…匠は。

俺とも長い付き合いになる割りに…って、俺の周りにいる匠以外って全員遊び人……か…？

うっわあ…朱美の事バレねえよーにしねーと。

「んじゃ買ってくるわ」

「おう、待ってる」

予想外にすんなりとプレゼントが決まったこともあり、結構手持ち無沙汰。どーするかな？とかつて考えながらショーウィンドウの間をブ

ラブラ。

しっかしクリスマス当日に男連れで来てるの俺達だけじゃん？？

来てるとしても指輪の受け取りだからなあ…、ちよー場違い。

…当日になんてくるもんじゃねーな。

そんなことを思いながら光を当てられてキラキラと輝くRINGをチラチラと見て回る。

まあ、プレゼントは買ってあるんだけどな…、一応。

んーこのデザインは朱美には甘過ぎか？？

このデザインだと…朱美指輪つけないよなあ…邪魔とか言われそう…。

このデザインだと…お、結構いいんじゃないか???  
そんなことを考えていると…。

「お待たせ。陽輔なんか買うのか?」

「あー、いや、見てただけ」

買いたい…とは言えねえよな。

「陽輔は何買ったんだ? 朱美に」

「ネックレス。ちょうど探してたら似合いそうなのあって、即買いました」

まあ普通は即買いくる金額じゃないんだけど…最近遊んでなかったからなあ。

金あったし。

ま、俺の場合は普通に独占欲だな。

自分の上げたもの身に着けて貰いたいし。

最近自分が女々しい気がする…(泣

「ふーん、二人何処まで行ってるん?」

「はっ!?!?」

噴出すってこういう時の事を言うんじゃないだろうか…。

口に何か含んでたら盛大に撒き散らしただろうな。

そんな俺の反応を見てほくそえむ匠の姿。

「別にガキの頃一緒にお風呂入ったとかじゃなくて…な」

「んなこたわかってる! つてか、よく覚えてんな、そんな前の事」

「何気に羨ましかったからなあ」

「はっ!?!?」

本日二度目。

…何度やるんだろう…。  
…ってか、羨ましいって…何???

「お前知らないだろ？朱美同級の間で一番人気あつたんだぜ？」

「…朱美が??？」

「そ。可愛かつたからなあ、朱美」

「…」

チョー複雑だ。

嬉しい。

正直嬉しいんだけど…、嬉しくない。

…俺以外のやつが朱美に気があつたってゆーのが気に食わない  
…ってどれだけ独占欲強いんだよ俺…。

ガキの頃の話…。

「今もモテるんじゃない？本人気づかないと思うけど」

「…さ、さあ？」

周りからはそう見えるのか???

確かに綺麗だと思うけど…これって俺が朱美を意識したから…じゃない???

…何気に競争率高いつて事か???

いやいや、でも今まで彼氏いた事ないって言ってたし…いや、でも…。

「…ぷつ、陽輔焦り過ぎだから（笑）お前マジ本気なんだなあ」

「…からかったのかよ」

「まあーな。それに朱美は俺にとっても大事な幼馴染だしな。気まぐれじゃ困る」

前半はおちゃらけながらの癖に後半は至極真面目な顔で正面から俺の顔を見据える。

まあ確かに俺の今までの付き合いって最低だったけど　って、言い返す言葉もねーな。  
でも。

「マチだよ。自分でも笑っちゃうぐらいな」

今までの俺の経験ってなんだったんだと思うぐらい、朱美の一挙手一同に振り回されてる。

ホント、かつこ悪い　けど、こういう俺も嫌いじゃない。

「そっか…、ま、鈍感な朱美相手だと大変そうだけどガンバレや」

「ホントだよ。あの鈍感さは絶対親譲りだよなあ」

「ああ、知衣ちいさん？ま、一樹かずきさんでないのは確かだろうな」

朱美の両親の名前で会話が出来るのはそれだけ家族ぐるみでの付き合いが多かったから。

そーいや一樹さんも知衣さんもあれ以来会ってねえんだよな。今度挨拶行つとくかあ。

「プレゼントも買い終わったし話題の幼馴染と合流しようぜ」

「そーだな」

二人して朱美と別れた地点に戻るが…。

「…いねえ」

連絡を取ろうと携帯を取り出すとメールが来ていることに気づく。

(…ブラブラって…何処にいるんだ?)

面倒なので電話。

トゥルルル、トゥルルル。

「ようちゃん?」

「朱?こつち終わったけど今何処にいんの?」

「ようちゃん達こそ何処にいる?」

「最初に別れたベンチのトコだけど」

「んじゃそこまで戻るねー、5分ぐらいで着くと思う」

「迷うなよー」

「くどいってばw」

電話の向こうでなにやら接客する声が聞こえたからどっかの店にいたのは確かだろう。

「朱美なんだって?」

「今から戻ってくるってさ」

「え…迷うんじゃないか?」

「ぷw幼馴染の意見は一緒だな(笑)くどいってさ」

匠とお互いに大事な幼馴染について話していると、向こうの方から当人の姿がこつちに向かって歩いてくるのを見つける。

「匠、迷わなかったみたいだぜ」

「ぷwホントだな」

結構ひどい会話か？（笑）

「何か買った？」

「え？あ、ううん…」

なんで目を反らすんだよ？？

意味わかんね。

言えないようなもの…もしくは言いたくないようなもの買ったのか？？

「朱美…お前嘘つけないんだから諦める」

匠も気づいたらしい。

ってか、気づかない方がおかしいんだよな。  
こいつのウソって。

「ちょっと小物…って、そんなことよりプレゼント何にしたの？」

「内緒w」

「えー！ずるい！私には聞いといて！」

「それは朱美が嘘つけないだけだろー」

なんか…ムカツク。

…心狭つ。

匠と楽しそうにジャレる朱美を後ろから羽交い絞めにする。

「よつちや…」

「お前時間ないんだろ？」

朱美の抗議の声は無視して、匠にさっさと行けと視線を向ける。

「そうだった、んじゃ、朱美また三人で遊ぼうぜ。俺これからデー  
トだから」

「どうやら通じたらしい。」

しかし…なんで3人なんだよ。

3人で遊ぶぐらいなら2人で遊びたいっての。

「って俺実はウザいんじゃ…、ちょっと凹む…。」

とは思うものの、いつまでも匠を見てる朱美にむかつき。

「ほら、朱、ぼーっとしない！俺らも行くぞ！」

「え？何処に？」

「東京」

「…って帰るだけじゃんかあ」

「こっちはこっちで予定あるんだ！」

朱美を引きずるようにしながら車へと歩いていく。

「こっちよりも回るとこは一杯あるし。ってか、予約に間に合わな

く…」

「…予約？」

「げ。」

「失敗。」

「…あ…っと… …なんでもない」

隠しとくつもりだったのに口が滑った。

「…ねえ予約って…??？」

「なんでもねえーってば」

「ねえねえ！」

「なんでもねえーって言ってるだろ！」

「そんなことない！絶対何か隠してる！」

こういう時の朱美はしつこい。

その後何度も何度も繰り返してそのことを聞かれたが……ここまでくるともう意地。

その後は全く言わなかった。

じゃないとサプライズの意味がねーだろ??

東京への帰路は騒がしいものになりそーだ（笑）

【陽輔編】 8・甘い物

「うっわー、可愛いレストラン」

やって来たのは東京からよつと離れた郊外にある洒落たレストラン。健司んトコの店で、ものすごく有名店。持つべきものはダチだなんてすげー思う。

「いらっしやいませ。ご予約ですか？」

「予約していた小野です」

「はい、小野様ですね。あちらの窓際の席にどうぞ」

案内されたのは一番奥まった所にある席。

俺がココに来るといつも通される席であり、店の中で一番夜景がよく見えるところでもある。

ほーんと、ダチって大事だよな（笑）

急遽決まったデートなのにまともなとこ連れてってやれるんだから。

「まさか本当に来るとは思わなかったよ、陽輔」

あーやっぱり来たか…って目線で声の主 健司を見る。

そりゃーここはコイツの両親がやってる店だし???

いたってしょーがねーとは思っし???

俺の為にクリスマスつぶして働いてるこいつにすりゃ、顔だして当然だとは思っけど…。

「初めまして」

…朱美に愛想を振りまくな。

このペテン師。

「は、初めまして、桜 朱美です」

「つてか朱美のやつ何あれ？」

「頼染めちゃってさ。」

「…あームカツクー！」

「緊張しなくてもタメだぜ？こいつは健司。俺の親友で今日ここ予約出来たのはこいつのおかげなんだ」

「つていつても丁度キャンセルが出たとこ優先的に取っただけなんだけどな」

「ばーか。普通に予約したら何ヶ月前だよ」

「実際だったら2ヶ月前ぐらいで埋まってたな。ま、陽輔の運がよかったつてとこだな」

「つていつてもそんな態度に出すわけにはいかないからいつもどおりに接する。」

「多分健司にはバレたと思うけど。なんでかって？」

「こっち見ながらニヤついてるんだから間違いないだろう。」

「朱美ちゃん。楽しんで行ってね」

「あ、ありがとうございます」

「コ、コイツ…。」

「人の気持ち知った上での行動だな！？」

「何してくれてんだコラー！」

「朱美に近づくなー！ー！ー！ーとか言えたらいいのに…。」

「どーせ幼馴染以上でも以下でもないですよーだ…。」

あー、なんかひねくれてきたな俺…。

「さっさと仕事戻れーサボリ魔」

「へえ、そんな事言っつていいんだあ？」

健司の目がキラリと光った事に気づかないわけではない。

朱美の耳元に口を近づけた健司。

何かをささやきかけて…。

「わあ〜！！！！！！わかった、わかったから余計なこと言つなよ  
!？」

こええ。

コイツは悪友。

うれしくない情報も多々持つてる。

…敵に回しちゃいけないって事か。

俺の顔を見て笑った健司の顔を睨みつけると、今度は健司の顔がこちらに近づいてきて…。

「俺貰つてもいい？」

とかいうから。

「ぜつてーさせねえ」

ガラにもなく健司の事をマヂで睨む。

そんな事をしてるこっちの意図を知ってるはずなのに涼しい顔して去ってくし…。

絶対敵に回しちゃいけないな…あいつ。

「健司さんようちゃんになんて言ったの？」

「…知るか」

言える分けない。

ってか、言いたくない。

ってか、健司の事気にするのやめるー、って叫びたい。

…出来ないけど（泣）

場の雰囲気を変える為にも…と、メニューを開く。

「朱ワイン飲める？」

「え？ん、一応飲めるけどいいよ、ようちゃん飲めないでしょ？  
車だし」

「じゃあ何飲む？」

「ん、メニュー見せて？」

「オレンジでいいや」

「ん、すいませーん、オレンジとジンジャエール1つずつで」

なんだか朱美の視線が注がれてる気がするけど…変なことしたか？  
???

メニューを指差しながらスムーズに注文を済ませたと朱美を見る  
と…。

（うつわ…）

首を傾げるとか…超可愛い…。

こいつ絶対自覚なんてないんだろうなあ、と俺の視線が自分の後ろ  
に行ってるのかと思ってるらしくて後ろ向いたりとかする  
し。

…なんでそんなに鈍感かなあ…。

まあ、そこも可愛いんだけど…。

程なくして料理が運ばれてくる。

前菜、スープ、魚料理、肉料理と運ばれてくる料理はどれもとても美味しい。

美味しい料理だと会話が弾む。

食べてる時間の方が少ないんじゃないかってぐらい色々なことを話した。

傍にいた小学校の時の事。

離れた後の中学校、高校のこと。

お互いの家族の事。

兄弟のこと。

そして受験のこと。

今の事など。

時間がいくら合っても足りないんじゃないかってぐらいポンポンと出てくる話題はさすがって感じ。

小さいときから一緒だったからか話のテンポも合うし、話していて本当に楽しい。

このまま自分しか見えないところに閉じ込めてしまいたいぐらいに…。

って、それじゃ変態か…。

最近俺のキャラ壊れて…ないか??

「こちらデザートになります」

そういつて出てきたのは雪が降りかかった綺麗なケーキ  
ユ・ド・ノエル。 ブッシ

ノエルはフランス語でクリスマス。

雨細工で施されているのはもう職人技とか言えないぐらいすごい。  
これでもかってぐらいクリスマスらしいデザート。

「可愛いだろ？」

「うん」

甘党だから結構よくここには来てるし、試食だとか行って新作食べさせてもらったりとかしてる。

男が作ったとは思えないぐらい繊細な味　って言ったら失礼か…。趣味…とは言ってるが、健司は健司なりに作ることに誇りを持つてる。

そついう所が健司の魅力なんだろうな。

「お気に召しました？」

視線を上げた先に居るのは健司で。

穴が開くぐらい可愛らしいケーキを見つめていた朱美に一言。

「ここでパティシエやってるの健司なんだぜ？」

「……………」

開いた口が塞がらないって言うのはまさにこの状態を指すんだろう。

…マヌケだ（笑）

「どう？結構上手いでしょ？」

デザートに関しては…俺が口を挟むトコじゃないな。

「健司さんパティシエだったんですか？私てつきり大学生かと…」

「よく言われるけど初めに思った通りの大学生だよ。陽輔と同じ大学、同じ学部だし」

「え？じゃあ…」

「この店俺の両親がやっててね。ガキの頃からよく作ってたから。親孝行みたいなもんだよ」

「…親孝行でお店が出せそうですね」  
「ありがとう」

…朱美の中の健司の好感度が上がったことが手に取るようにわかる…。

…嬉しくねえけど…しゃーないか。

コイツの腕は俺もすげーと思うし。

でも、ムカツクもんはムカツクんだよな。

しかもなんかここぞとばかりに朱美に何か吹き込んだし…。

帰ってく健司の後姿を睨んでしまうのは…仕方ないだろう？

「ねえ、ようちゃん、健司さ…」

拳句朱美に健司のこと聞かれるんだから…。

嫉妬心という醜い感情が俺の中に芽生える。

つていつても朱美はまだ誰のものでもないんだけど………だけどっ！

抑えられないんだからしゃーない。

へーへー、俺はガキですよー。

クールな陽輔とかホントどこ行っただらうね。

欠片も残っちゃいねえ。

…これでいいのか俺…。

「ようちゃん？」

(ん?)

気づくと顔の前にケーキが乗ったフォーク。

(え?)

「いらない？」

上目遣いに俺のことを見上げてくる朱美…。  
反則だろ、それ。

さっきまでイガイガしていた気持ちがスーッと消えていくのを感じる。

そして パクッ。

(ケーキも上手いけど…食わせてもらっただけなのが余計おいしく感じさせるw)

「おいし？」

「ん」

食後の紅茶を頂いた頃にはお店に来てから既に3時間が経過しようとしていた。

(9時過ぎたか…んじゃ、ぼちぼち次行くかな)

「朱、そろそろ行くぞ？」

「あ、はい」

鞆から財布を出している朱美をその体制のまま扉の外に追い出す。  
クリスマスだぜ？

しかも惚れてるし。

女に金出せる気はない。

俺が席をたつたのをどこかで見ていたんだろう、レジの所に健司が現れる。

「お？もう行くのか」

「ああ、いくら？」

「2人で一万でいいよ」

あっけらかんとそう言い放つ健司だが…。

「ばーか。客として来てるんだ。ちゃんと取れ」

「常連客になつてくれそーだからいーんだよ」

そう笑つていえる健司が、悔しいけどカッコいいと思う。

一本筋が入った職人堅気つてこういう

「でも…」

「今度また2人で新作の試食にでも来てくれればいーよ」

「おじさん…わかりました。ではまた来ます。すごくおいしかったです」

「ありがとう。いいクリスマスを」

「ご馳走様でした」

カランカランとカウベルの音が夜の静寂の中に響く。

車の近くに寒いのか襟を立てさせた朱美。

「お待たせ、乗って？」

冷え切った車内に暖房を入れたいが…まだエンジンが温まらない為  
もう暫くこのままだな。

そんなことを考えていると財布から適当に掴んだらう札束が俺の  
胸に押し付けられる。

そんな朱美の手に触れると…冷たい。

…外に出すんじゃないかと、朱美が洗面所に立ったときにでも会計を  
済ませるべきだったと反省する。

俺はもともと受け取る気はなかったから、

「いらない」

と、突き返す。

案外あっさりと言いたから、多分どっかに入れ込もうとでもしているんだろ？なあくとは思うけど…、見つけたら見つけたでまた返せばいいし。

返す口実でまた誘えるんだから…そういうのだったら別にいいかなと打算的なことを考えたりして。

車はゆっくりと都内を目指して走り出した。

## 【陽輔編】 9・イルミネーション

### 9・イルミネーション

やって着たのは東京駅。

車をその辺りのパーキングに止めると、朱美の手を引き歩き出す。ビジネス街というイメージのあるこの街でありえないぐらいのキラキラ光るイルミネーション。

両脇のライトアップされた街路樹が綺麗に煌めいている。

朱美に何か言おうと思うが、言葉に出す寸前で思い留まってしまう。イルミネーションとクリスマスマスという雰囲気のためか、普段よりも余計に朱美が可愛く見えてしまうから、口を開けば抱きしめてしまいたいそうで…。

でもなんだか今のままで居たい気がして…進むのを躊躇う。

… ホント、俺じゃないみたいだ。

「ついたぞ」

そんなことを思っているうちに目的地にしていた公園に到着する。多分何処に向かっていたのかわからないであろう朱美が正面を見て、はっとして息を呑んだのがわかった。

目の前にあるのはライトアップした3つの噴水。

色とりどりのその噴水はビジネスの街【東京】に似合わず、とても幻想的だ。

「…キレイ」

息を呑んだ朱美の口から出た言葉に、連れて来てよかったと思う。

また、朱美と一緒に見れてよかったと思う。  
何より…喜んだ顔を見れたことが一番嬉しかった。  
三つ並んだ噴水が色を映し出し、変わる色ごとにその場の雰囲気が変わっていく。  
水が間接証明の役割をして優しく辺りを照らし出す。

「昔っからこういうの好きだったろ？」

毎日沈む夕日の色が違うんだと、毎日毎日飽きずに丘の木に登っていたことが印象に残っていたんだ。

最近まで忘れてたのにな…。

人間の脳はすごい。

好きだと思ったその瞬間から今までのことが事細かに思い出せるんだから。

「うん、……ありがとう」

少しびっくりしたように。

けれど、それ以上に嬉しそうに言う朱美。

ホント…抱きしめていいか？…って感じなんだけど…とは思ってグッと我慢。

「ねえようちゃん。実はあの時あんまり色の名前覚えてなかったでしょ？」

「…さあ？覚えてねえや」

「そっか」

あの時つてのはたぶん飽きずに丘の木に登っていたときだろう。覚えてないなんて嘘で、ホントはちゃんと覚えてる。

当時俺は色なんかに何の思い入れもなかったから、茜色だとか、鶯

色だとか、朱美が言う『色』がどんな色なのかなんて全然理解なんてしてなかった。

どっちかっていうと、そうやって生き生き話してる朱美といえるのが楽しくて付き合ってた感じだったし。

噴水の色はコロコロ変わって、また同じ色に戻っていく。

また、出会えた俺達のように…、廻って戻ってくる。

バレないように朱美を盗み見ると身震いしているのが目に入る。

可愛い格好だが…この時間になってしまつとさすがに寒いだろう。

そう思うと考える間もなく、俺は朱美を抱き寄せていた。

俺が風避けになるような場所に朱美を閉じ込める。

「んな格好だと寒いだろ？なんで今日に限ってそんな服着てるんだよ」

本当は嬉しいんだけど…、俺だけが見ていたいとか思ってしまう。

他の奴に朱美のこんな姿なんて見せたくない。

独占欲丸出しだけど…本音なんだからもうしよーがないだろう？

「めかし込んで来いって言ったのはようちゃんでしょ？」

確かに言ったけど…。

でもなあ…。

「んな服着て来たことないだろうが」

再会してから何度か2人で遊びに行っているが、朱美がこんな女の子らしい服を着たトコなんて見たことない。

いつも少年っぽい格好だったから。

だからホントにこんな女の子らしい可愛い服着てくるなんて…思いもしなかったんだぜ？

「…友達に見繕って貰ったんだもん」

ちよつと捻くれて口を尖らせる朱美。

こいつは…俺を煽ってるのか？？

試してるのか　？？

…って、無自覚だろうな…（泣

「まあ、…似合ってるからいいけどな」

ホントはべた褒めしたいけど…俺そういうキャラじゃねーし…。  
他の女なら齒の浮くような台詞でも平気で言えるんだけどなあ。  
腕の中の朱美がモゾッと動いた気配がしたので顔を向けると、首を  
傾げてこちらを見る朱美の姿。

「…ホント？」

「こういうことで嘘つかねえよ」

「ホント？」

「だ〜か〜らあ〜」

どういったら信じるんだろう？

襲いたいぐらいに煽ってくれてるの懸命に押しとどめてるのに…。  
いっその事…襲っちゃおうよ？

「ホントね」

幾度目かの問いかけの後、本当に嬉しそうに。  
子供みたいな無邪気に笑うから。

顔を近づける。

キスがしたいから　。

でも…。

ポーン、ポーン

何処からか聞こえる鐘の音に、幸か不幸か理性が働き出す。腕時計を見るとクリスマス・イヴが終わったことを示している。

『Merry Christmas !!』

同時に同じ事を言ったことに二人してクスクス笑いあつて。

「ちょっと待ってて？」

そういつて朱美に回していた腕を、めっちゃめっちゃ名残惜しいが放して。

胸ポケットに手を入れる。

取り出すのは朱美に似合うだろうと一目ぼれしてプレゼント。

都合よく朱美は俺とは逆方向を向いているから、そつと背後に近づき、腕を回す。

「え？」

「こら、ちょっと動くな、止められないだろう？」

振り向こうとする朱美をそのままの体勢に固定する。

小さい輪を通すのは思った以上に困難だが、それももう手馴れたもの。

「ほら、出来た」

時間をかけることなく、朱美の背後から離れる。  
朱美の手がネックレスに近づいて、それを捕らえる。

「Merry Christmas 朱美」

言葉に詰まったような顔をしてこっちを見る朱美に、サプライズの成功を知り、なんとも言えない達成感に包まれる。  
しばらくはにかんだ笑みを浮かべていた朱美だが、自分の鞆の中からプレゼントらしい包みを取り出して俺にさしだす。

「俺に？」

答える代わりに頷くから。  
それがすごく可愛い。

「開けていい？」

その言葉に首を縦に振るのを見届けてから、包みを丁寧に取り去っていく。

朱美からの初めてのプレゼントに胸が高鳴る。

まあ、朱美からってだけで何をもらっても嬉しいわけなんだけど。

「…あ」

出てきたのは俺好みのシンプルな財布。

「財布じゃん！覚えてたんだ？前にちよつと言っただけだったのに」

「…え、あ…うん」

「大事に使っから。サンキュ」

伝えたいと思った。  
想いを。

先の事とか考えずに、知ってほしいと思った。

「なあ、朱美」

「ねえ、ようちゃん」

2人呼びかけがかぶったのにはびっくりした。  
でも、悪い予感はいなかった。

俺の勘って結構当たるんだよね。

「あ、何？ようちゃんからどうぞ？」

「いや、朱の方からでいいよ」

「ううん、ようちゃんの方からで…」

「もう、二人同時にしようか」

「そうだね」

俺が言いたいことはもう決まっている。  
伝えたい。

積もりに積もったこの想いを。

『せえーのっ』

胸が高鳴る。

緊張と、期待と、ほんの少しの不安に…。  
そして。

『好きだ（です）』

まさか同じこと考えてたなんて誰が思う??

嬉しい通り越すよな、もう!

驚いた次の瞬間には、二人して笑ってた。

その後話したんだ。

お互いの恋愛話。

聞かれたくない話も沢山あったんだけど…それも俺だから。

朱美には…受け止めてもらいたかったから、全部話した。

もちろん受け止めてくれた。

なんかちよつと…そら恐ろしそうな空気を感じたけど…まあ、気の

せい…だよな??

来年も再来年もず~~~~~と、一緒に居ようぜ。

『Merry Christmas !!..!』

【陽輔編】 9・イルミネーション（後書き）

クリスマス企画だった割に…もうそろそろ初夏とかいう今日この頃…。

遅くなってしまい申し訳ありません。

やっと朱美編と同じところまで来ました！

朱美編とは別にもうちょっと書く予定ですので、もうしばらくお付き合いです！

【陽輔編】 10・その後の二人（前書き）

お待たせいたしました！

一応、最終話になります。

ちよっとラブラブw

では、どうぞ。

傍にいる。

それが普通になってしまったから…。

触れたいと思う。

近づきたいと思う。

だって、もう触れることも近づくことも許されたんだから。

「キスしていい？」

「えっ？」

顔を真っ赤にしてフリーズする朱美の顔を観察するのが最近の日課だ。

朱美に今まで彼氏がいたことがないって事で、俺にとっては拷問のような…かなり清い付き合いをしている。

付き合ってそろそろ3ヶ月余り。

それなのに朱美は手をつないだって真っ赤になって俯く。

可愛いんだけど…可愛いんだけど…、そういう顔をされると襲いたくなる男の心情を少しは理解してほしい と最近思う。

もちろんもう手放す気はないからそんな無理なんだろうけど。

「ダメか？」

「え…えっと…」

こんな朱美とキスまで進んでるのは…まあ、俺が手を出したからなんだけど…（笑）

や、だって、考えても見ろよ??

好きな女が隣にいるんだぜ!??

たまに家で飯作ってくれたりするんだぜ!?

触るなっつて方が酷だろっ???

え、違っ???

いや、違わないはずだ。

大切にはしたいけど…俺ももちろん男なわけで。

理性と本能のハザマでいろいろ葛藤があるわけよ。

「朱美?」

再度名前を呼ぶと朱美の視線が今まで以上に泳ぎ始める。

まあ、逃げ道なんて作ってないから当たり前なんだけど。

え?ひどい??

そんなことないだろう???

っつてか、俺が3ヶ月も手出さずにいる方を褒めてくれよ。

そろそろ22になるんだぜ、俺。

…俺の忍耐を自分で褒めてやりたいぐらいだ。

朱美の方は嫌だっつて分けじゃないみたいなんだけど…恥ずかしいら

しくてこんな風に聞いても滅多にOKしてくれない。

でも…俺は したい。

「ダメ…か?」

ちよつと落ち込んだかのように再度朱美の顔を覗いてみる。

すると朱美の顔がさらに真っ赤になり、ブンブンと音が聞こえるぐ

らいに首を振る。

「じゃあ…いい?」

もともと隣に座っていたからそんなに離れていないんだけど、朱美に尋ねながらもっと距離を縮める。

朱美の視界の中に俺以外が写らないくらい近い所まで…。

「…うん」

息を感じられるぐらいの距離。

一体顔つてどれくらい赤くなるんだろう？つてのが素朴な疑問。

だってほら、さっきも真っ赤だと思ったのに…もっと赤くなってく

。朱美の答えが聞こえてすぐに俺の身体は動く。

額に、目尻に、頬にキスを落としてから、柔らかい唇へと移動する。

『好きな人は媚薬のようだ』と言ったのは誰だっただろう？

欲しくて、欲しくて、触れるともっともっとと求めてしまう。

満たされることのない欲求。

何処までも 君が欲しい。

「…っ…よ…ちゃん…」

息を吸いたくたくたく抗議の声を上げたであろう朱美を無視して、チャン  
スとばかりに深いキスを始める。

朱美の手が俺のパーカーをギュツと握り締めるのを感じて、理性が  
警告を出す。

『そろそろ止めないといけない』と。

止めたくないと思う本能と、止めるという理性。

毎回この板挟み…。

欲しい。

壊してしまいたいぐらいに…。

こんな俺の感情を朱美は知らないだろうけど。

相手を思う故に黒くなってしまう部分は…朱美には知らないでいて  
欲しいと思う。

今回もまた理性の方に勝敗があがる。

ゆっくりと唇を解放すると朱美が荒い息を吐く。

「…ごめん」

大事にしたいのに…出来なくなる。

どうして上手くいかないんだろ…？

たまに自分が怖くなるだ。

朱美を傷つけてしまうんじゃないかと…。

もっと離れていたほうがいいのではないかと…。

でも、そういう時に限って。

「陽ちゃん…好きだよ？」

俺を安心させてくれる。

顔を真っ赤にするけど…ちゃんと受け止めてくれる…。

傍にいて欲しいと訴えるように…。

大事にする。

でも…ゴメン。

そこまで長くは待てないと思う。

朱美がとても好きだから…。

【陽輔編】 10・その後の二人（後書き）

どうでしたか？

クリスマス企画だった割にこんな時期まで延びてしまいましたが（  
^ | ^ ; ）

またラブラブ書きたくなったら追加するかも知れませんが…ノロノ  
ロ執筆なお付き合いくださり、ありがとございました。また  
いつか、どこかで。（2008/05/16）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3129d/>

---

『幼馴染みのクリスマス』

2010年10月28日01時02分発行